
COCOON

桂まゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

COCOON

【Nコード】

N5248N

【作者名】

桂まゆ

【あらすじ】

発売から、一ヶ月弱で1億のユーザー登録を記録した、次世代オンラインゲーム「COCOON」。それは、リアルにファンタジーを楽しめる世界だった。その世界に「俺」は生まれた。

空想科学祭2010参加作品。

こいつ、SF祭なのにファンタジー書いてるよというツッコミは…
…心して受け取ろうと思います。

2011/3/28 7章以降改稿しました。

プロローグ

「特徴は、どうされますか？」

女の声が、機械的に告げた。当たり前だ。相手はコンピューターなのだから。

私は、ヘッドギアのようなものを装着して、リラクゼーションソファアーに座っている。このヘッドギアと腰に負担のかからないクッション付きで売り出されたゲームソフトは、「COCOON」といった。

架空の人物となって、ファンタジー世界を自由に生きる、昔からよくあるオンラインゲーム——Massively Multiplayer Online Role-Playing Game——のあらたなひとつに過ぎなかったゲームは、一月で一億のユーザー登録に至ったという。

なぜならば、それはゲーマー達がずっと夢にみていたバーチャルRPG。プレイヤーは、自らが生み出した「生きた」キャラクターを「五感を通して」操作出来るというものだったから。

「もう、仮想現実とは言わせない」というキャッチコピーは街中のいたる所でみかけられた。

そして短期間に一億というユーザーを受け入れてなお、特にさしたる不具合も見せなかったそのシステムに、私は何より驚嘆した。

そのソフトが、今、静かに起動している。

私は、もうすぐ「COCOON」に生まれるのだ。

自然、わくわくとする。どのような世界が私を待っているのか。思いつく能力データを打ち込むと、コンピューターが勝手に計算して微調整をしてくれる。私がイメージしたのは、「人間」の「戦士になれる人物」だ。ファンタジーRPGを楽しむならば、最初はこれを選ぶのが王道だろう。

「では、特に有利な特徴と特に不利な特徴をひとつずつ選んでくだ

さい」

機械化された音声で、そう告げる。

有利……やはり、こういうゲームをプレイするなら、強い体を持つている方が良さだろう。不利の方は……出来れば、肉体的に不利な特徴は持ちたくない。できれば、人間的なものがいいな。そう、女好きとか……。

「有利な特徴は『強靱』。不利な特徴は『好色』を選択しました。能力値を確認してください」

モニターに、細かい文字が羅列される。

入力されていた名前に続き、様々な能力値や細かい癖など、読むのもまどろっこしい。

画面をスキップすると、

「体力、筋力、敏捷性にプラス1、知力にマイナス1の修正があります。合計生命点が増えました。ランク2までの金属鎧の着用が可能です。『魔法』の習得は不可能です。このキャラクターでプレイされますか？」

それは、大事な事らしい。コンピューターの音声で念押しをしてくる。

「いいよ、それで」

やがて、目の前に「COCOON」という文字がでかかと浮かび上がる。ゲーム開始らしい。

「それでは、ヴァンヘイル・ソウルダム二世。良い旅を」

コンピューターからの音声で遠ざかって行き、私は闇に包まれた。これから起こる出来事への不安と期待に心を躍らせながら、その中へと落ちていった。

1 エデン

瞼の奥に光を感じた。ゆっくりと、重い瞼を動かしてみる。

と――、「俺」の目に映ったのは、真っ赤な口を大きく開けたドラゴンだった。

喰われる！

思った瞬間には、身体が動いていた。マントを跳ね上げると、右手には既に銃が握られている。

身体が勝手に動くのか。さすが冒険者だなど、どこか遠い所でそう考えたような気もするが、現実にはそんな余裕は全くない。

勝手に反応する両手を後目に、全身にアドレナリンが分泌されて嫌な汗が吹き出している。何より、悲鳴が全く止まらない。

「恐れることはない。ヴァンヘイル・ソウルダム二世」

変に落ち着いた声が、響いた。すると、ドラゴンが小さく頭を垂れる。

ドラゴンの後ろから姿を現したのは、白髪で髭を長く伸ばした老人だった。灰色のローブを纏い、手には妙な形の杖を持っている。ムービーで見る魔法使いそのものだ。

「ようこそ、エデンへ」

「エデン……？」

既に口の中はカラカラだ。俺は唾を飲み込んで、老人の言葉を繰り返した。

鼓膜を通して、初めて聞いた「俺」の声。声帯がかすかに震えたのが解った。そう、これは確かに俺の喉から出た声なのだ。そう、俺はこの世界に生まれたのだと、改めて実感する。

「さよう。『COCON』は、いくつかの小さな世界で成り立っており、中でもそなたが生まれたこの世界は、「エデン」と呼ばれておる。これからそなたはこの「エデン」で生きて行く事となるのだ」

しわがれた老人の声が石造りの室内で反響して、わんわんと響いている。とても、うるさい。

「そうそう、自己紹介がまだであつたな。僕は、サイフオーン。この世界に生きる連中は、僕のことを予言者と呼ぶ。さて、ヴァンヘイル・ソウルダム二世よ……」

「俺を、フルネームで呼ぶな」

NPCだと解っていたが、気に障ったので取りあえず凄んでおく。案の定、老人は顔色ひとつ変えなかった。

「この世界でどう生きるかは、そなたの自由。冒険の旅に出るもよし、街に店を持つもよし。だが、見たところではそなたは戦士志望のようだな、ヴァンヘイル・ソウルダム二世」

「うるさい」

俺は、手に持った銃を構えた。

そんなつまらない話を聞くために、生まれたわけではない。

何より、初めて見た光景がドラゴンの顔で、初めて抱いた感情が恐怖だった事に、とても苛立っていた。

引き金を引くと、白い光線が矢のような起動を描いて老人の額に吸い込まれて言った。と見るや、その顔の上半分が吹き飛び、血と体液がまき散らされる。

狭い室内は異臭に満たされた。

「僕の頼みを、聞いて……」

老人であつたものは、それでも身体を痙攣させながら俺に歩み寄り、半分以上吹き飛んだ頭からの血に全身を染めながら、行動を続けようとしている。

さすがに、気分が悪くなってきた。

自分の流した血で全身を汚しながらも、歩みを止める事のない、老人。そしてその傍らでは例のドラゴンが、異変に気づきもせずじやれついている。

思った通りだ。これは、初心者用のチュートリアルクエストに違いない。

だが……何事もなかったかのように行動を続けようとする老人の
呂律がどんどん回らなくなってくると、また、嫌な汗が出てくる。

俺は、慌ててその部屋を飛び出した。

老人もドラゴンも、俺を追いかけて来ることは無かった。それでも、あの生ける屍が背後に迫っている気がして、薄暗い廊下を駆け抜ける。

立派な作りの扉を開け放つと、まばゆいばかりの光明に包まれる。青い空には、太陽の他にいくつかの月がうつすらと浮かんでいる。そう、これが「COCOON」。空に浮かんでいるあの月は、「繭」だ。その繭世界に生まれた俺たちは、その世界で生きる。

——もう、「仮想現実とは言わせない」。そんなキャッチコピーが脳裏を過ぎった。

太陽に向けて手をかざすと、くつきりと血管が浮かび上がる。現実には決して在ることがなかった、力強くがっしりとした、俺の手。そう、これはこの世界で生きる「戦士」の手だ。
なるほど。

確かに、これは今までのコンピュータゲームとは違う。

俺は、自分がすべきことをする為にここに存在しているのだ。

余計なチュートリアルなど、必要はない。

そう、自分に改めて言い聞かせてしまうのは、NPCとはいえ人を撃った罪悪感なのかもしれない。

傷つけた相手の痛みを、ありありと体感させる。確かにこれは、「仮想現実」とは言えない。

息をおもいきり吸い込むと、濃密な大気が体中を満たした。一步、前に踏みだしたその先にあるのは、分かれ道。

右に行けば、うつそうと茂る森。左には少し離れた先に川が見える。

俺は、左の道に向かった。

身体は自由に動く。走ろうと意識するまでもなく、足が勝手に動く。しかも、身体が軽い。

これが、「COCOON」！

川にかかる橋を渡ろうとして、いきなり足を踏み外した。

浮遊感、そして、落下。

落ちた？ 橋を渡ろうとした筈だ。それなのに、何故？ いや、そんな事を考えている場合ではない。いや待て。これはゲームだ。だから怪我をしたりは……そこまで考えた時に、尾骨にとんでもない痛みが走った。

尻をしこたまぶつけたらしい。とりあえず、立ち上がれないと。

土手に生えた草を掴み、呻く俺の頭上から笑い声が降って来た。

「その橋は、チュートリアルクエスト用の戦場に繋がる橋。クエストを放棄した者は渡れないわよ」

そう言っ て土手の上でくすくすと笑うのは、黄色い鳥を肩に乗せた少女だった。

身体も出来ていないが、可愛い顔立ちの——出来れば、五年ほど後の姿にお会いしてみたいタイプの女。

「何だ、お前は」

「あたし？ あたしは、リンコ。ちなみに、この子はインコ」

肩の上の鳥を指さし、少女は付け加える。そんな事は、どうでも良い。というか、ちょっとイラつとした。

「あはは。どうしよう、黒炎。彼、怒ったみたい」

「とりあえず、上がって来いよ」

少女の隣から顔を覗かせたのは、黒い全身鎧を纏った——俺の数倍も重装備の男だった。その男が差し出した手を取り、何とか土手から上がる。

「ありがとう、助かった」

「いや、別に。あんたを見つけたのは、リンコだ」

ぶつきらばうに、男は答える。リンコと違って、こちらはかなり寡黙のようだ。

その間に当のリンコは俺をまじまじと見て、「ふうん」と呟き、

やがて納得したように頷く。

「あなたが、ヴァンヘイル・ソウルダム二世でしょ？」

にっと、少女が笑う。俺は、驚いて彼女を見た。

「あんたもしかして、GMなのか？」

俺の言葉に、リンコは思いつきり嫌そうな顔をする。

「どうして、そう思うかなあ」

「そうでなければ、何故俺の名を知っている？」

「だって、ニュースになってるから」

と、また意味ありげに笑う、リンコ。

子供のくせに、表情がすごく巧みだ。いや、子供とは元々そんなものだったのかも知れない。

だが、次の言葉は更に俺を驚かせるものだった。

「予言者サイフォーンが、生まれたばかりの戦士に殺されたって」
そうだ。確かに俺はそんな名前のNPCを撃った。

頭を半分吹き飛ばされながらも、俺に歩み寄ってきた。あの悪夢のようなシーンが反芻される。

「あいつ、死んだのか」

撃たれた後も動いていたから、てっきりNPCは死なないのだと思っていたのだが。

「額を射抜かれたら、普通は死ぬでしょ？ 重要なNPCは基本的に生死判定に成功するように出来ているけど、あなたが部屋を出た時点で必要性が無くなったから普通に死んだ筈よ」

なるほど。あの男がしゃべり続けていたのは、俺に例のチュートリアルの説明を聞かせ続ける為だったのか。

では、もう初心者用のチュートリアルは行われないのか？ など
と思っていると。

「ま、もう新しい予言者サイフォーンは生まれてるけどね」

と、事もなげにリンコが告げ、

「あいつが殺されるのは、いつもの事だからな」

寡黙な重装戦士が初めて、笑みを見せる。

「あ、こっちのおっきいのは黒炎。見ての通りつよいおじさんだから、無謀なこと考えちゃ駄目よ」

勿論、そんなことは考えていない。普通に、俺よりかなり強いだろうなと想像出来る。

「あの男は、そんなに殺されているのか？」

「邪悪な死霊術師サイフォンを殺した所でチュートリアルクエスト終了という流れなのよ。クエストをすつとばした初心者に殺されたという例は……他にあったかな？ あんたもしかして、『短気』で『残虐』だとか？」

「そうだったかな……」

よくよく考えて、首を振る。

「不利な特徴」はそういう風に使われるのか。では、俺が人を殺す程に苛々してしまったのは、リアルの自分の精神状態に問題があるのかも知れない。

そう、よくよく考えなければ解らなくなっていた。「俺」が「誰」なのか。この世界が——実は、ゲームの世界だという事も。

「ちなみに、あんたらは何でここに來たんだ？」

「そんなの、予言者を殺した初心者の顔を見に來たに決まってるじゃない」

きつぱりとリンコが言い、後ろで黒炎が頷く。

「えらく暇人だな」

呆れる俺に、「あら」とリンコが眉を上げた。

「もしかして、旅や冒険が世界の全てだと思ってる？ これだって、大切な役目なのよ——残念ながら、今は言えないけど」

やばい。この女、面白い。守備範囲外だが、妙にそるものがある。単に、初めて会ったプレイヤーキャラクターだからなのかも知れないが。

と、リンコの肩に止まるインコが小さく動いた。

「お、新しいニュースだ」

インコがリンコの耳元で嘴を動かす。不意に、リンコの可愛い顔

が険しくなった。

「黒炎、仕事だ。悪いね、ヴァン。ほったらかして行くけど、この道をまーすぐに行くとか街があるからね。そこでイベントが始まるから行ってみたら？」

「イベント？ あんたらもそこに行くのか？」

初めて出会った人たちに、何となくついて行きたい気持ちもあった。そんな俺の内心を見透かしたかのようにリンコが笑う。

「あたしらの道は、まっすぐには続いてないんだなあ。でも、ヴァンはそうじゃないかも知れない」

やはり、リンコと黒炎はベテランプレイヤーだという事か。

初心者に、変に手を貸さないベテランプレイヤーの存在。俺にとってこの世界はとても素晴らしいものに思えた瞬間だった。

ゲームシステムだけでなく、住む住民も素晴らしいのかと。

「あんたの道は、今はまっすぐ続いている。その道をまっすぐ行けば……きっと、何か見えてくることを祈って」

リンコが俺の手を取った。

「良い旅を。ヴァン」

黒炎もまた、俺の手をがしつと掴む。

「これは忠告だが、仲間を探すなら、知力にマイナス修正を喰らってない奴を仲間にした方が良いな」

珍しくいっぱいしゃべってくれたと思ったら、川に立てられた立て札を指さす。

そこに書かれていた記号は、俺には全く読めない。多分、「この橋渡るべからず」みたいな文字が書いてあるのだろうという事は予想出来たが。

「純戦士が一匹狼を気取るには、けっこう厳しい世界なんだ」

「黒炎！ 何をぐずぐずしてるのよ！」

少女にすっかり牛耳られている「戦士」を見て、ああはなるまいと心に誓いつつ。改めて冒険の道へと一步を踏みだした俺は、その数時間後に彼らを恨む事になったのだ。

2 アゼリア

「どうです？ そろそろ消えそうですか？」

女の言葉に、俺は首を横に振った。

「困りましたねえ……」

おっとりとした口調は、どうやら癖のようだ。出会ってから半日以上になるが、この女が早口でしゃべっていたのは本当に窮地に陥っている時だけだったから。

それよりも、問題なのは俺の手の甲に刻みつけられている痣。

赤黒い十字の形をした傷跡のようなもの。その印は、「あえて誰かと言われたら、むしろ本人に自覚させる為に」刻まれるらしい。

だからその痣自体に害があるわけではない。問題なのは、その痣が刻まれているという事実だ。

それは、あるフラグが立った人間に刻まれるのだという。そのフラグとは、「犯罪者フラグ」。つまり俺は、犯罪者の烙印を押されたということだ。

考えれば、当たり前前の事だ。「罪もない」NPCを殺害したのだから。例えそのNPCがクエストの最後に、より凶悪な犯罪者となつてプレイヤーキャラクターに牙を剥く予定だったとしても、俺が出会った時はただの「上から目線の嫌なじい」というだけの存在だった。腹が立ったからといって殺してしまったのは、自分でもやりすぎだと思う。

だが。

これを言い出すのは、甘ったれた事だと言うことぐらいは解っている。それでも。

初心者相手に、それぐらいのことは教えてくれておいても、罰は当たらなかつたのではないかと。

逆恨みとは知りながらも。

切なそうに溜息をつく女と目が合う度に、思いたくなるのだ。

このフラグが刻みつけられた直後に出会った二人のベテランに対して、どうしてもそんな苦情が言いたくなる。全くの八つ当たりだとは解っていたが。

女は、アゼリアと名乗った。

年の頃は、二十代前半。細かいウエーブのあるブルネットの髪と白い肌の持ち主。——これがまた、俺の広いストライクゾーンの中でもかなり真ん中ストリートな女だったのだ。

決して美人過ぎない、それでも人好きのするおもて。ふつくらとした胸元は革鎧に覆われているが、その首筋の白さが、否が応でも鎧の下に想像をかき立てる。

たまに口元を尖らせる。そんな幼い仕草が魅力的な女。

彼女と出会ったのは、リンコたちと別れて間もなく。言われたままに街道に沿って——多少、回り道をしながらも——歩いていた時だった。

深い森の中で、街道から外れすぎないように気をつけながら、注意深く歩いていた。街道沿いとはいえ、危険がないとは限らない。時折耳を打つ獣の鳴き声に、嫌が応にも警戒心が高まる。

不意に、女の悲鳴が耳を打った。やや、間をあけてからもう一度。俺は、無意識に駆けだしていた。武器を手に、その悲鳴が聞こえた方に向かった。

街道を逸れて東に入って行ったあたりで、先ず目に入ったのは、二階建ての廃屋。悲鳴の主を捜して辺りを見回す俺の前に立ちはだかったのは、一体のスケルトンだった。

アンデッドの中でも、雑魚中の雑魚。

どこのどいつだ、こんなもん相手に悲鳴を上げた奴は。苛立ちながら、その一体を屠る。

悪夢を見たのは、その直後だった。

俺を取り巻く土塊の中から、一体、また一体とスケルトンやゾン

ビが起きあがって来たのだ。

昔のムービーで見た事があるシーンのようだ、などと考えている場合ではない。

やはり、身体の方が先に反応した。だが、その反応のままに連射をするのはまずい事も、「俺」には解っていた。

俺の武器は、「銃」だ。初期マスター技能に「戦闘技能：ガンマン」を選んでいるのだから、必然的にそうなる。

初心者には敬遠されると噂に聞く、その技能を何故わざわざ選んだのかと言えば——戦術的に非常に有効なものだったからだ。

この世界の銃は、火薬を使わない。

銃を撃つのに必要なのは、「精神力」と「魔力」だ。直接ダメージに影響するのが、「精神力」。そして、銃を打ち出す時に使われるエネルギーが、「魔力」なのだ。

銃の連射は一気にマナ不足に繋がる危険性がある。故に、初心者には敬遠されがちだが、最初から銃の特性を理解していれば、問題はない。

ダメージを大きくして、乱射しないようにすれば良いのだ。簡単な話だ。狙いを外さず、一撃で屠ればマナ不足にはならない。——

大多数の敵に囲まれるような羽目に陥れば、話は別だが。五匹ほど屠ったところで、奴らは徐々に数を増やしながら、間合いを詰めて来る。

更に、五匹。至近距離に迫った奴らを屠る。軽く目眩を感じた。さすがに、まずいと自覚する。

と。

「ああああ、ごめんなさい。ごめんなさい」

斜め後ろのあたりから、甲高い声が響いた。少し、力が抜ける。すぐに、片づけます。本当にごめんなさい」

グリフォンによく似た生き物——馬の身体に鷲の顔と翼を持つ生き物は、後で聞いたらヒポグリフという幻獣だった——に跨った、若い女。軽やかにその幻獣から下りると、

「ぐりちゃん、行ける？　がんばって」

その背を軽く叩かれ、ヒポグリフは女を守るようにアンデッド向かって威嚇する。

「すみません、力を貸してください」

俺の了承を取る事もせずに、女は詠唱に入る。背後は完全にから空きだ。

仕方ないので、しばらくつき合う事にした。

幸い、敵のターゲットはほとんど女に集中している上に、奴らは特殊攻撃は使って来ない。動きも鈍いので、引きつけてから撃つ戦術が一番有効だった。

女の詠唱が完了した。

「我が求めに応じ、出でよ！」

女の腕に巻かれたクリスタルのひとつが激しく輝き、そこから炎が巻き起こった。

炎は女を包み込み、巨大なひとつの影を作り出すと四方に散る。

炎の精霊か。では、この女は魔法使いではなく召喚士なのだろう。

「ありがとうございます。後は何とか……」

大きく息をついた女の背後に迫ったスケルトンを、反射的に撃ち抜いた。その時になってやっと、自分が狙われていた事に気づいた女が悲鳴を上げる。……あぶなっかしくて、仕方ない。

「す、すみません。うまく召喚出来たから、ついつい調子にのっちやって。いつもは、もう少し気をつけてるんですけど……」

必死に謝る女を可愛いと思うのが、半分。げんなりとしているのが、半分。

「おい、あんた」

「はい？」

「気が散るから、少し黙ってろ」

女が黙ったので、俺はしばらくそこにいる敵を殲滅することに集中する。やがて、不思議な事に気づいた。銃を撃つたびにマナが消費される。それは、疲労となって蓄積されていくのだが——少し前

から、その疲労を全く感じていない。

女の歌声にようやつと気づいたのも、その時だった。

呪曲か。この女は召喚士であり、バードでもあるらしい。決して先頭に立たず、周りをフォローする。そういう役割が居る事は、俺のような戦士にとって、とても有り難い。

やがて、湧いていたアンデッドたちが沈黙する。

目的を失った炎の精霊が消滅し、女もやつと口をつぐんだ。

「声が洩れた……」

小さく咳き込んだ後で、女は俺を見上げた。あらためて、頭を下げてくる。

「巻き込んでしまつて、すみませんでした。実は、あの館から出る時に楽器を落として踏みつぶしてしまつて……」

この女、思つた以上の粗忽者らしい。

「呆れますよね。私、本当に駆け出しで……」

「敬語はいいよ。俺は多分、あんた以上の駆け出しだ」

そう、俺の方こそ生まれて一刻も経っていない。戦闘に慣れているように見えるのは、「すぐにでも前に立つて戦える」ように作られた「純戦士」だからだ。

多分、俺がソロプレイ中に今のような集団に囲まれてしまつたら、殲滅は不可能だっただろう。生きて逃げ切れたかどうかも解らない。

「えええ！ そうなんですか？ だって、ぐりちゃんより硬いのに」

きりと唇を噛む、女。若輩者に助けられた事より、俺の防御力の高さがペットに優つた事の方が悔しそうだ。

「それは、俺が純戦士だからだろ？ それより、敬語はやめてくれ」

「あ、これは癖ですから気にしないで下さい。それで、ですね。とても言いにくいんですけど……」

地の底から響き渡るようなうめき声が大地を揺るがしたのは、その時だった。

「まずううい！」

女が血相を変える。

「また、下僕を召喚されてしまいます。早く倒さない」と
「何を？」

俺が言う間に、女は廃屋の扉を睨みながら、新たな詠唱に入っている。

その間に、扉はきしみ、ゆがみ——壊される！

「待つて、早い！」

女が言う前に、蝶番ごと扉が吹き飛んだ。

額に王冠を抱いた巨大なスケルトンが、「ボス登場」さながらに、姿を現す。

その瞬間。銃のエネルギーチャージが一気に上がった。SFM——スペシャル・フィニッシュ・ムーヴと呼ばれる、解りやすく言えば「必殺技」ということになるか——を撃つタイミングに入っただ。

無論、そのエネルギーは自然に湧くものではない。俺のmanaからチャージされるのだ。撃てば、その消費量は半端ではない筈だ。

だが。敵を見て武器が「撃て」と言った。

あるいは、「撃つたら、もしかしたら生き残れるかも知れない」と言っただのかも知れない。

どちらにしても、俺は引き金を引いた。青い閃光が、スケルトンロードに向かって伸びる。が、それに気づいたスケルトンロードは直撃をかわした！

俺の持つ銃のSFMは「必殺の一撃」。全manaを使って一撃を放ち、敵の核を撃ち抜くというものだが——その攻撃を外してしまえば、結果は目も当てられない。

万事休す。

そう思った時だ。奴の身体がぼろぼろと崩れ始めたのは。俺の放った「必殺の一撃」が奴の核の一部をかすめていたのだろう。

そう思う間もなく、俺の目の前は真っ暗になった。

唇に温かい感触を覚えて、俺は目を開けた。

召喚士の女の顔が間近に映る。なんだよ、やる気まんまんか。

俺は彼女を抱き寄せてその唇に舌を割り入れた。と、後頭部を思いつきりはたかれる。

「何をする！」

「そつちこそ、いきなり何をするんですか！」

「先に仕掛けたのは、そつちだろ？」

女の目が、いきなり冷たくなった。居心地の悪さを感じて、頭を掻く。さっきはたかれた場所が、じんじんしていた。

「結構、力があるんだな」

「こつちの手も、痛かったですよ。……いけないいけない。先に言うべきことは言っておかないと。助かりました。本当に、ありがとうございます」

かなり、投げやりに女が言う。おかしいな、こんな筈では無かったのだが。

憤慨しながら女がポーションボトルを片づけたので、先刻のキスの意味にやっと気がつく。マナ回復の効能があるポーションを、口移しで飲ませてくれたらしい。

「いや、こつちこそ勝手にぶっ倒れてしまつて面目ない」

俺に言われ、女は大きく首を振る。

「いえ。勝手に巻き込むわ、マナを限界まで使わせるわ……しかも私の方が先輩なんですよ。どうしよう、本当に恥ずかしい」

改めて頭を下げて、そしてやっと笑ってくれた。照れたような笑顔が、魅力的だと思った。

「私は召喚士で、アゼリアって言います。で、この子がヒポグリフのぐりちゃん」

またか。

「ヴァンヘイルだ。ところで、自己紹介をする時に、ペットの名前まで紹介するのがこの世界の流儀なのか？」

「さあ？ でも、お気に入りの子ですから」

当たり前のように言われると、何となく納得してしまうから不思議だ。

いわゆる「犬の散歩中に、自己紹介より先に犬紹介が始まる」ようなものなのだろう。

「で、あんたはここで何をされていて、あんな事になったんだ？」

アゼリアの話では、この「ロンダールの館」は駆け出しの冒険者には格好の狩り場なのだそう。1F部分は基本的に雑魚しか湧かないが、地形による通行障害を上手く利用しながらの立ち回りを覚えることも出来る。それに、戻ろうと思えばすぐに街に戻る距離なのだと。

ひとつだけ気をつけなければならないのが、入ってすぐの部屋に設置されている召喚クリスタル。この館に置いてあるそれは、ランダムにエネミーを呼び出す。それでも、一日に一度の運試しで、ここを訪れる度にクリスタルを起動していたのだという。

「それで、現れたのがあいつか」

「スケルトンロード。生きている限り——って、最初から死んでるんですけど、下級のアンデッドを無限に召喚します。まさか、あんな大物が出るとは思わなかったので、焦って飛び出したんですよ。その時に楽器を落としてしまって。しかも、踏んで壊してしまって。

……その時は、お花畑が見えました」

てへつと笑う、女。笑い事じゃないだろう！

「あんたがひとりで冒険をすること自体が、無茶なような気がしてきた」

軽く額を抑える俺を、彼女は睨み付ける。

「楽器さえ壊れなければ、そこそこぐらい行けてるつもりなんですけど」

その大切なアイテムを落つこととして、しかも踏んで壊す奴がそう言うのか。とは思ったが、明日は我が身かもしれないので、取りあえず黙っておく。

「それより、街に行きませんか？ お礼に何かご馳走しますよ。ア

ルトっていう街なんですけどね、いつも賑やかで、いっぱい屋台と
かあって面白いですよ」

「そういえば、この先の街でイベントが起こっているって言われた
な」

リンコたちと別れてから、数時間ほどか。なんだかひどく昔のよ
うな気がする。

「イベントですか？　だから、狩り場に人が居ないのかな。でも、
誰がそんなことを？」

「リンコっていうガキだ。肩にインコを乗せた変な奴だった」
言われて、アゼリアが少し考える。

「メッセンジャーバードを連れていたんだったら、多分情報屋です
ね。基本、街の中から動かないものだと思いますけど。とり
あえず、街に行きましようか。安心したら、お腹が空いて来ました」

アゼリアが言った通り、街はかなり近くにあった。距離的には。

時間がかからなかったかと聞かれると、首を思いつき横に振るが。

街の手前でアゼリアはヒポグリフから下りて、徒歩になる。小さ
な言葉を唱えると彼女の右手首に巻かれたクリスタルの数珠が輝き、
ヒポグリフが吸い込まれるように消えた。

「街には、召喚獣を連れて入っちゃいけないんですよ。普通の馬は
OKなのに。差別ですよね」

腹立たしげに告げる、アゼリア。普通の馬とヒポグリフを比べた
時点で無理があるとは思ったが、とりあえず頷いておく。彼女が自
分の召喚獣の中でも、ヒポグリフを溺愛している事は嫌と言うほど
に解っていた。

奴と契約した時の武勇伝を延々と身振り手振りの上に擬音をまじ
えて、しかも立ち止まって聞かされたせいで、街に着くまでにかな
り時間を費やしたのだから。

そして、ようやくとたどり着いた街で。

「立ち去れ、犯罪者め」

俺をまっさきに迎えたのは、その一言だ。

その場に居合わせた全員が、俺を見た。その目は何故か嬉々としているように見えた。

「犯罪者？」

「犯罪者が、こんな所に？」

驚いたように振り返ったアゼリアの姿が、人波の中に消える。

何人かが、武器を抜いた。俺の足が自然、後じさる。ここにいると、危険な事ぐらいは解った。

と。

その人波の向こうで突如、悲鳴が上がった。

「乗って！」

差し出された細い手を、俺は迷いもなく取る。

「町中で、召喚して良かったのか？」

ヒポグリフに騎乗したアゼリアの細い腰に捕まりながら、俺が言う。

ヒポグリフは街を離れ——やがて、街道を大きく外れて森の中に向かっていた。アゼリアは、全く手綱を取っていない。慣れない道を、あえてヒポグリフに任せることで、追っ手を振りきるつもりらしい。

「全然、良くないですよ。ギャラリーを傷つけていたら、私だって犯罪者になってしまいます。て言うか、一体何をしたんですか！」
アゼリアに、生まれてからの経緯を説明する。巻き込んでしまったのだから、説明するのがせめてもの誠意だと思ったからだ。

「それで、初心者に『犯罪者フラグ』ですか。解っていたら、街に連れていったりしなかったのに」

街や村、城には必ず「衛兵」や「自警団」が居て、犯罪者はそれらのNPCに暴かれる。俺がそうであったように、街に入る事を拒まれるのだ。

「犯罪者」を捕らえた者には多額の賞金が支払われるし、何より

「徳」が上がる。それに、万が一戦闘になっても、「犯罪者」相手なら罪を問われない。

「凶悪な犯罪者」というプレイスタイルをあえて楽しみたいのだから、
「犯罪者」フラグが消えるまで大人しくしておくのが一番だし、俺だって自分にフラグが立っていると解っていたら、大人しくしていた筈だ。

だから。

そのフラグが立った直後に出会い、特にそのあたりの忠告をしてくれなかったベテラン二人に、恨み言を言いたくなる。それが、ただの八つ当たりだという事は解っていたが。

「おまえ、さ」

今、そこに居ない二人に心の中でどんな恨み言を言っても、事態が好転するわけではない。だから、おれはあえて口を開いた。

「お前って言わないで下さい」

ぴしゃりと、言い返される。ああ、もう。何て言うのだ、この感情は……うっとおしい、か？ それとも……おもはゆい？ 解らないので、とりあえず苛々する。

その苛々を何とか治めるべくゆっくりと息を吸い込み、改めて彼女に語りかける。

「アゼリア」

「はい」

「何で、泣いてるんだ？」

返事はなかった。

答える気がないのか、それとも泣いている事を俺に気づかれて、プライドが傷ついたのかもしれない。

だから、別の質問をした。

「何で、俺の逃亡に手を貸した？」

ヒポグリフを止め、女が振り返る。その瞳はもう、濡れていなかった。

「魔がさした。それだけです」

琥珀色の瞳が、俺を睨む。だが、それはすぐに哀しげな色に変わった。

「私、アルトから離れたことないんですよ。今回も、ちょっと冒険してみたけどすぐに戻るつもりだったから……」

「だったら、俺の事なんかかまわずに戻ったら良いじゃないか。追っ手はもう居ないぞ？」

「出来ないから、途方にくれてるんです」

「何故？」

「道に迷ったからです！」

今度こそ、アゼリアは涙を隠さなかった。

いや、この状況で泣きたいのは、どちらかと言えば俺の方だと思うのだが。

「アルトに帰りたい……」

くすんと鼻をすする、アゼリア。さっきからもやもやしているこの感情の正体が、やっと解った。この期に及んで全然肝が据わっていない女への、苛立ちに違いない。

「そんなに人が恋しいのか？」

俺の声には、嘲りが含まれていただろう。

「恋しいのは、人じゃないです！」

「じゃあ、何だよ」

ぐっと、女は言葉に詰まる。だが、俺の視線から目をそらすことなくぽつりと呟いた。

「お腹が減ったんです」

「ああ？」

「お腹が減ると、すごく切なくなるものなんです」

言い切られて、俺もついに認めざるを得なくなった。

さっきからの苛立ちの一部が、実は空腹から来ていることを。

「冒険者が、空腹ぐらいで弱音を吐くなよ」

俺の反論は弱い。

「なんていう事を！ 腹が減っては戦はできないんですよ」

それは、正論だった。だから、沈黙するしかない。

そうこうしている間に日が傾いて来た。旅慣れない俺たちが、夜の森に行くのは、さすがに危険だろう。

「野営でもするか？」

「野営道具、持っていません」

これこそ、けんもほろろ、だ。

だが、アイテムを持っていないから何も出来ないと思いこむのは間違いだと思う。少なくとも、この世界は、そんな風に作られていない筈だと思いたい。

「少しは、前向きに考えろよ」

「考えていますよ。この土地の事を知らない、そして夜が迫っている。だから——安全な場所でぐりちゃんが立ち止まるのを待ってるんです」

「そいつに任せていたら、絶対に街には行かないぞ？」

「今、探しているのは野営をするために安全な場所です。道具一式を持っていない上に素人なんですよ、私たち」

今度という今度は、ぐうの音も出ないほどにうち負かされてしまった。

野営に備えて目が見えるうちに枯れ枝を拾ってみたが、何も無い所から火を熾す自信は全くない。アゼリアの事は、笑えない。この期に及んで、真剣に考えていなかったのは、実は俺の方だった。

もつとも、アゼリアが思うような場所には一晩歩き続けても、出会える気もなかったが……。

俺がそんな事を考えている時だった。ヒポグリフが足を止めたのは。

アゼリアの肩越しに周りを見回し、俺は愕然とする。

そこにあつたのは、人造の建物。

夜の闇に浮かび上がる、窓のあかり。そして煙突からは煙が出ており、美味そうな匂いがあたりに立ちこめている。

「家？ いや、村か？」

よく見れば、家は一軒だけではない。

現在、明かりがついているのはその一番大きな一軒だけだったが、その奥には何軒かの建物が見えた。

手袋を外し、手の甲を見る。痣は消えたのかどうかを確認するた
めだが、暗くてよく見えない。

周りを見たところ、NPC自警団の姿はない。

俺は、すぐに決心した。

腹が減っているのも、アゼリアが切なそうにしているのも、事実だ。だがもつと切迫した現実が俺の前にある。

少し前に、かすかに感じた耳鳴り。それは、今、俺の耳元でがんと鳴っている。

この耳鳴りが最高潮に達する前に。せめてこのお人好しの粗忽者だけは、安全な場所に連れて行ってやりたい。いや、俺はそうするべきなのだ。

唯一明かりがついた建物では、数多くの人の気配がした。

ひとり、ヒポグリフから降りてその店の前に立つ。扉が開いたのはその時だ。

その奥から、調子っぱずれの歌声や楽しげな笑い声があふれ出した。そして、何よりも美味そうな――煮焚き物の匂い。

「あれ、お客さん？ お疲れさま。ゆっくり休んで行って」

出てきた少年に促され、俺たちは迷いもなくその店に足を踏み入れた。

俺たちに休息を与えてくれたのは、「憩いの酒場」というベタな名前の酒場だった。看板にそう書いてあったらしいが、生憎俺には文字は読めない。

ここが何なのかという俺の質問には、店でバーテンダーを勤めるひげ面の男が答えてくれた。

「冒険者の、冒険者による、冒険者の為の村。ま、別の言い方をす

れば『プレイヤーキャラクターによる違法占拠地』だわな」

そう言っただけはと大声で笑うと、俺の背中を叩く。もう少しで、囓っていた肉を口から飛ばす所だった。

「で、あんたらはここに来るのは初めてだったか」

「ええ。私たち、駆け出しで」

上品な手つきでシチューを口に運びながら、アゼリアが答える。

「駆け出しが二人して、腹を減らして歩いているとは可哀想に。でも、その駆け出しがアルトからも街道からも外れて何処に？」

「このあたりを探索中だったんですよ」

事も無げにアゼリアは答えるが、それはかなり苦しいぞと、ひそかに思っていた。

探索の旅に出るのに辺りの地図もテントや寝袋などの荷物も、食料はもちろん水筒だって——俺に至っては初期装備以外——持っていない。駆け出しとはいえ、冒険者は普通はそんな無茶はしない。言い換えれば、そんな無茶な冒険者は『COCOON』では生き残れない。

だが、アゼリアは「うっかり者の初心者」を演じ通すつもりらしい。

食事中にも、俺は手袋は外さなかった。明るい場所で改めて確認すると、まだ痣が消えていなかったからだ。

俺たちの様子を代わる代わる見ていたバーテンダーが、やがてにやりと笑った。

「そういえば、昼前に来たリンコたちが言っていたね。犯罪者フラグをつけた初心者が来るかも知れないから、温かく迎えてあげて。ヴァンヘイルって、あんたの事だろ？」

ぶっと、俺は酒を吹き出した。

右手が腰を探るが、そこに武器はない。店に入る時に預けてあるからだ。

「はいはい。怖い顔しないの」

そう言っただけ、俺のグラスに酒を注いだのは給仕の女。俺のストラ

イクゾーンからはかなり離れた、人の良さそうな中年女だ。

「ここは、どんな冒険者でも受け入れる村よ。もつとも、あんらがここの住人たちと問題を起こさなければ、だけど」

「それは、勿論」

慌てて、アゼリアが答える。俺も無言で頷いた。

それにしてもあのガキ、やっぱり解っていて黙ってやがった。今度会うことがあれば、絶対に文句のひとつも言ってやる。

「とりあえず、今日はゆつくりお休み。朝になれば市場が開くから、必要な物資はそこで買いそろえたら良いよ。この村には銀行がないから、手形払いになるけどね」

「銀行？ 手形？ そんなシステムがあるのか」

「現代人らしい発想でしょ？ でも、それが『COCOON』なんだよね」

よくあるファンタジー系RPGのように、モンスターが金を持っているわけではない。だが、そのモンスターに賞金が懸かっていれば、銀行に賞金が入金される。また、プレイヤーキャラクターは本人にしか使えない「手形」を持っており、その手形を使って買い物をすれば銀行から勝手に引き出されるという仕組みになっている。

自動振り込み、カード払い。なるほど、確かに現代人の発想だ。

「市場って、楽器も取り扱っています？」

「勿論だよ。綺麗な召喚士のお嬢さん。朝までに、お嬢さんに合うものを取りそろえておこう」

アゼリアの質問に、背後から別の声が答える。

だが、俺の耳鳴りはとてもひどく、もう顔を上げていられなかった。

「もう、そんな時間？」

俺の様子に気づいたらしいアゼリアが、耳元で囁く。そんな時間って、どんな時間だ？

「実りのある一日だったようだね、お疲れ」

給仕の中年女の言葉に被るように。

「お疲れさま、ヴァン。良い夢を」

柔らかな指の感触が俺の頬を滑った。

「おやおや、いきなり酒場でログアウトかい。なかなか見上げた初心者だな」

それが、その日『COCCOON』で聞いた最後の言葉となった。

出来れば、その前の台詞で終わって欲しかったと思いながら——俺の意識は、深い眠りへと落ちて行った。

3 冒険者の村

アラーム音が、かなり騒々しく鳴り響いている。手を伸ばして電源をオフにすると、やっと静寂が戻って来た。

ヘッドギアを外すと、いつもの白い部屋が目に入る。

『COCOON』へのログイン時間は、一時間と決められていた。その時間が経過したので、あちらの世界を強制退去させられて、私は「現実」に帰って来たのだ。

かなり長い時間をあちらの世界で過ごしたような気がしていた。

だが、現実にはたった一時間。時間の流れ方が、全然違うのだろう。

「あ、お目覚めですか、先生」

軽くノックの音が響き、見慣れた小太りの男が入って来た。

「お帰りなさいと、いう感じですかね？」

「お帰りなさい」と改めて言われて、私は自分が落胆している事に気がついた。

『COCOON』は、ただのゲームに過ぎない。それでも——私
はもう少し、ヴァンヘイルとして生きていたかった。

「どうでしたか？ ゲームの世界は。楽しかったですか」

「そうだな。思った以上にはまりこんでしまった」

素直に答える。

「できればもう少し、夢を見ていたかったよ」

ブラインドの下りた、暗い部屋。白い壁、手が届く場所に置いてある、本棚。そしてベッド。私の部屋だ。その空間だけが、今の私の世界。私はそこで生きている。

その、何と小さな事か。

「お疲れのようですね。ベッドに戻りますか？」

「いや、このままで良い」

「でも、少し体勢を変えた方が……」

「ほおっておいてくれ」

ぴしゃりと言いつつと、男は少し哀しげな顔をした。

桐島という名の男は、二十年以上前から私の側に居る。最初は「助手」だった。それがいつか「秘書」になり、今では「世話役」と呼ばれている。

二十年間ずっと、私の我が儘を聞き続けてくれている。考えて見れば少し気の毒な男だ。しかも、まともに身体を動かす事も出来なくなつた今、私の側にいつも居るのはこの男だけになっていた。

「今日は、僕の言うことを聞いてもらいますよ。本当に帰ってこられるのかと、すごく心配していたんですから」

もっともらしく言われて、私は腹立たしげに彼から目をそらした。感謝はしている。気の毒だとも思っている。だが私はこういう時のこの男の態度が大嫌いだった。

「それは、悪かつたな。うるさいのが帰って来て」

「また、そんな嫌味を言う」

困つたように溜息をつく、桐島。そうやって、本当に言いたい事を誤魔化す彼の態度が私の癪に触るのだ。

「でも、お元気そうで安心しました」

「心にもない事を言うな」

「先生、いくら僕でも怒りますよ」

むつつりと黙り込んだ私に、桐島はもう一度溜息をもらした。

「少し早いですが、お食事をお持ちしましょうか？」

私は首を振った。腹は減っていない。空腹感など、ここ数年感じた事もない筈だ。

「気分転換に散歩でも？」

男が指さす先には、車椅子がぼつんと置かれている。

「いや、良い」

『COCOON』での記憶は、まだまだ新しい。

あちらの世界では私は戦士で、会ったばかりの女と共に命からがら街を後にして、空腹に嘆いていた。

やっとたどりついた村で夕飯にありつき、酒を飲んでいる途中だ

った。

その全てが、今の私にはない。

自由に動く強靱な身体も、若い女と出会う事も、空腹という感覚すら、私には与えられないのだ。

私は、冒険者ヴァンヘイルではない。その現実が、寂しさを産む。
「また明日、具合が良ければ出来ますよ」

私はさぞかし哀しい顔をしていたのだろう。桐島が気遣わしげに毛布を纏わせてくれた。

「明日、なのか？」

「駄目ですよ。最初からそういう約束でしたからね、先生」

ヘッドギアが、私の手の届かない場所に置かれる。今日のうちにまたログインするのは無理のようだ。

「解ったよ」

「そうそう、会いたい人には会えたんですか？」

私は、桐島を睨んだ。この期に及んで、その話題を振って来るのか。

「解らない」

「解らないんですか？」

目を瞑れば、思い出されるのは、肩にインコを乗せた少女。

ヴァンであつた時は、気がつかなかったが、彼女が「そう」なのかもしれないし、違うかも知れない。そもそも、彼女がどんな顔をしていたのかも、今となつてはよく解らない。

『COCON』は、夢と同じだ。あちらに居る時は現実の私のことを忘れてしまい、帰って来ればあちらで起こった事は幻のようにあやふやになる。

「きっと、君に出会っても解らないのだろうな」

私の言葉に、桐島がおかしそうに笑う。

「そうなんですか？　じゃあ僕もやってみます」

「そうだな。君なら口うるさい老人の役がお似合いだ」

「また、そんな事を言う。僕だって、意地悪で口うるさくしている

わけじゃないんですよ」

「そうか。てつきり腹いせかと思っていたよ」

「先生には、感謝していますよ。本当に」

「そう思うなら、しばらくひとりにしてもらえるか？」

桐島が、私の事を考えてくれているのは解っている。沈んだ心を浮上させようとしてくれているのも、また。だから彼には申し訳ないことは解っていたが、私はもう少しあの世界の余韻を味わっていたかった。

会釈をした桐島が扉の向こうに消え、足音が遠ざかって行く。何もない部屋に、沈黙が落ちる。

私は長い間、独りだった。

今より身体が動いて、仕事をこなしている時さえも、ずっと独りだった。

小さな世界で、寝て、起きて、食べて、仕事をして、また寝て。

心が死んでいた。そんな事にも気づかなかった。

そんな私に光をくれたのは……。

カーテンの狭間から差し込む、弱い光。その光をまといつかせた少女の幻影が浮かぶ。

彼女は、もういない。

その時に再び死んだ心が、小さく疼く。無謀な冒険者ヴァンヘイルの影響だろうか、忘れていた感情があふれ出す。

彼女は、もういない。だから——その魂を留めようとするのは、残された者のエゴに過ぎないのだ。

- - - - -

目を開けると、ブルネットの髪が視界に広がった。

俺の隣で、テーブルに突っ伏しているのは、アゼリア。彼女は俺がログアウトする直前と同じ場所で眠っていた。

指を伸ばして、その柔らかそうな髪に触れようとすると、俺の手

が彼女をすり抜けた。

ぎよつとして、慌てて手を放す。

「おや、おはよう。ヴァン」

そう言つて奥から出て来たのは、昨日のバーテンダー。どうやら、この店の店主マスターのようだ。

「アゼリアなら、あちらに帰つてるよ。しばらくこの村の中をうろつろしていたんだけど、あんたがいつ戻つて来るか解らないからな」
言われてみれば、アゼリアの衣装はログアウト前とは違っていた。薄手の革鎧を脱ぎ、綺麗な色のシャツと動きやすそうなパンツを着用している。

「なんで、ここで寝てるんだ？」

基礎知識として、ログアウトする時は宿屋のベッドか自宅で行うのが一番安全である事は知っている。

「ベッドでログアウトするように言つたんだが、ここで良いってな惚れられてるね。ヴァン」

「それはない」

キスただけで力いっぱい頭を叩かれたのは、記憶に新しい。

「ログアウトすると、こんな風に影が残るのか？」

「酒場や宿屋、後は自宅でログアウトすると、そうなるな。他の場所だといきなり消える。で、ログイン時にその場所に突然現れる事になるから、危なくて仕方がない」

「狩り場で突然落ちたら、えらいことだな」

それは、オンラインゲームにはよくある現象だ。だが『COCO ON』では大きな接続障害は、今の所報告されていない。

アゼリアは、安心しきつた寝顔をしていた。油断しすぎだろうと苦笑する。もつとも、これは「影」なので、俺には手の出しようもないが。

「出会つたばかりの相手なのに、何でこんなに気を許した顔をしてるんだか」

呟くと、マスターが髭を揺らして笑った。

「あんだだつて、暢気な顔をして眠っていたぞ」

それを言われると、さすがにきまりが悪い。目をそらす俺に、更にマスターがたたみかける。

「あんたらは、まだパーティは組んでないんだつてな」

「そんな余裕は、全くなかったよ」

いきなり戦闘に巻き込まれ、街に行くと「犯罪者」扱いだ。幸い、手の甲の印は消えていたが――アゼリアは俺にとって、トラブルメーカーなのではないかと疑ってしまう。

「あちらの世界の人脉は、こちらには持ち込めない。そういう仕組みになっている。例えば友達同士でプレイしたくても、そう簡単には巡り会えない世界だ」

マスターに言われて、俺は顔を上げる。

「多重世界だから？」

「その通り。どこの世界に生まれるかは、プレイしてみないと解らない」

「何故、そんな仕組みにしたんだろう？」

「さて。それは解らないが、そんなゲームを求める者が少なくとも一億人以上は居るんだ。面白いものだ」

気のあつた友達同志でプレイするのではなく、ひとりで生まれ、誰かとの出会い、交流を広げる。彼だつて、そうやって「冒険者の村」の一員になったのだろう。

職人たちが集まつて、ひとつの村を造る。それが、今更ながらとても凄い事のように思えた。

「あんたは、冒険者になろうとは思わなかったのか？」

「最初は、ソロプレイ可能の戦士になるつもりだったんだが……欲張り過ぎて、中途半端になっちまったんだ。自給自足をするつもりで、「釣り」とか「料理」とか、変なもんばかり覚えちゃつてな」

髭を揺らして、男が笑う。

「結局、そっちの技能を伸ばして、この店を持つ事にした。冒険者の村には絶対に「酒場」が必要だしな」

それは、すごい方向転換だと思った。だが、そういう生き方もあるのだろう。

「そうそう、イベントの続報が入っているぞ。噂の粹は出てないらしいが、近々『バツガードの武具』のレプリカが出回るらしい」

「そうなんですか？」

突然、となりから声が上がリ、俺は飛び上がった。

いつの間にかアゼリアが目覚ましている。

「あ、おはようございます。ヴァン。ところでマスター、今の話って？」

『バツガードの武具』とは、『起源の冒険者』たちの為に詠えられた特別製の装備品だ。詠えたのが、ドワーフの鍛冶屋のバツガード。なので総称して『バツガードの武具』と呼ばれている。

と、いう話を俺は知っていた。多分、俺が持っている「基礎知識」の中にあつたのだろう。

「起きたか。アゼリア。レプリカの話は、うちを利用してくれる客が『速報』を飛ばしてくれたんだ。詳しい話は街の情報屋に聞かないと解らん」

「ここにも、情報屋が居れば良いんですけどね」

アゼリアが拍子抜けしたように嘆息する。髭面が笑った。

「そこまで便利になっちまったら、逆に面白くないぞ。ここで全部揃うじゃないか」

それもそうだ。「速報」が入るだけでも、この村を拠点にしている冒険者にとっては便利な筈。

「あ、あんたらも良ければ情報を寄越してくれよ。アゼリアなら、お手の物だろ？」

「まあ、そりゃあ。でも鳥を連れていると、情報屋と間違えちゃうから嫌なんですよ」

「鳥？」

不思議に思う俺に、アゼリアが頷く。

「鳥を使役して、伝書鳩代わりに使っんですよ。でも、鳥を連れて

歩いてるのは情報屋だつていう認識があるから……」

「色を青にしなければ良いだろ？ メッセンジャーバードは青い鳥だつて決まってるんだから」

バーテンダーに言われて、アゼリアが「はいはい」と承知する。一件落着。だが、どこか釈然としない気分がもやもやと残る。

何だろうと考え、すぐに気がついた。

「俺たちが一緒に旅をするのは、決定事項なのか？」

「勿論」

アゼリアが、嫣然と笑った。

「私がひとりで旅するのは、無謀ですから」

それは、昨日俺が言った台詞だ。だが、別に「仲間」になると言っただけではない。

「ヴァンは、嫌なんですか？」

上目遣いに見据えられて、俺の覚悟は決まった。嫌な訳がない。

ログインした時に隣に彼女が居て、とても安心したのだから。

「じゃ、俺が立会人になろう」

マスターが言う。

こうして、俺とアゼリアのパーティが誕生する事になった。

4 『約束の地へ』

アゼリアが取りだしたカード——この世界での身分を証明するものだ——の裏に書かれた俺の名前の下に拇印を押す。俺の持つカードの裏にはアゼリアが名前を書いて拇印を押した。

これで、パーティーは成立。

立会人が何故必要だったかと言うと——俺が、自分の名前を書く事が出来なかった事と、アゼリアの名を読めなかった事。

つまり、第三者である代理人がどうしても必要だったからだ。正直「知力」にマイナス修正がつくというのが、こんなに不便だとは思わなかった。その不便さを補って余る力を、有しているとしても何にしても、こうして俺たちは正式に「仲間」になった。「仲間」になると、便利な事が色々ある。

ログイン時間が、即座に知れる事。離れた場所においても、連絡するアイテムが使用できるようになる——そのアイテム自体を手に入るのが、ちょっと大変だったりするのだが——事。そして街の警察にある「地図球」に仲間の居る位置が示される事。

こちらの世界では、ログイン時間が違うなどの理由で、同じパーティーメンバーでも会えない事が多い。故に、そのような措置が執られている。だが、それらの機能を一切起動させないことも可能だった。ストーリー対策だろう。

俺たちは「冒険者の村」を拠点に、冒険を続けた。酒場のマスターが言った通り、この村では武器防具などの装備品をはじめ、地図やランタンなどの必需品、ポーションなどの消耗品まで揃った。

だが、パーティーを組んだと言ってもずっと一緒に行動していたわけではない。ログインする時間も違うしログアウトの時間もまちまちだった。

だから、ひとりの時はそれぞれが地道に、自分のスキルを磨いていた。相手がログインしたのが解ると「冒険者の村」で待ち合わせ、

情報交換をしてどのような冒険をするかを決める。

そして、念願の軍馬が購入できる程度の金が貯まった頃には、俺たちはガーディアンモンスターを相手に出来る程までに強くなっていた。

ガーディアンモンスターとは、その名の通り宝を守っているモンスターだ。宝そのものよりも、モンスターを倒して得る報奨金の方が割が良かったりするが、マジックアイテムなどは基本的にモンスターの持つ宝からしか出ない。

故に、ガーディアンモンスターが湧くと思われる場所には先客が居ることも多いが、かなり広域に渡って探し歩かなければならない事もあり、取り合いになった事はない。

「出ましたよ、ヴァン」

倒したばかりのデーモンの宝箱を探っていたアゼリアが、そう言っ
てて右手を挙げた。

そこには、金色のブレスレットが握られている。

なんとかという長い名前が付いていたはずだが、略して「無線」とか「携帯電話」とかは呼ばれている。つまり、そういうアイテムだ。

パーティーメンバーとリンクすることで、離れた場所に居ても会話ができるという……。

「これで、二個揃いましたね」

「便利すぎるアイテムは、どうかと思うが」

差し出されたブレスレットを左手に装着し、テストしてみる。

感度は良好だった。

「便利すぎて程でもないでしょ？ 危なくなったら呼びますから、絶対に助けに来て下さいね」

ひとりでは、そこまで危険な場所に行く気もないくせに。そう思うと、おかしくなる。

何はともあれ、アゼリアがどうしても欲しがっていた物が揃ったので、俺たちはやっと長い旅に出る事が出来た。

様々な街を巡り、情報を集める。

村で用意した地図の書き込みが増えて行くのは楽しい事だった。例え、それを読む事が出来なくても。

俺が生まれてから、こちらの時間でひと月も経った頃。

俺たちは、「コース」という名の街にたどり着いていた。

街に着いたのは、夕刻近く。早速宿を決めて軍馬を厩舎に預けると、俺たちはいつものように別行動を取る。

アゼリアは露店を見て回るのが好きらしいが、そんなものにつき合っていない仕方がない。それに、アゼリアと一緒に行動していたら、出来ない事だってあるのだ。

連絡手段であるブレスレットを外し、大通りを離れて露店がひしめきあう路地をゆっくりと歩く。

コースは、どちらかといえば小さな街だった。俺が今までに回った街の中で一番大きな街は首都「ダイン」。とりあえず人が多くて、情報屋の前では軽いラグまであった程だ。路地も、編み目のようにはり巡らされ、長く続いていたが——ここは、すぐに人気の少ない場所に出た。

あるとしたら、このあたりだろう。鰻の寝床のように間口の狭い店が並んでいる。

目を凝らして、目当ての看板を探す。そこに書いてある文字は読めないが、この世界では半数近い人間が文字を解しない為、看板には解りやすく絵が描かれている事が多い。

デザートローズ
石の花。

それを見つけて、俺は扉を開けた。ちりと涼しげな音色が響く。「いらっしやい」

真紅の、身体にぴったりとしたドレスを纏った、えらく肉感的な女が出迎えた。

「お客さん、初めて？」

女は、遠慮のない見定めるような視線を俺に送る。多分、値踏み

をしているのだろう。

「ガザのファルナからの紹介だ」

「なんだ、そっちかい」

少しつまらなさそうに、女は眉を寄せる。

「リーザ。お客さん。部屋に入ってもらうよ」

言われて、薄汚れた店の奥からひとりの女が姿を見せる。その肩には青い鳥が乗っていた。

街には必ず、情報屋が居る。文字が読めない俺は、情報が欲しければ情報屋から仕入れるしかない。

そして同じ情報を仕入れるなら、シチュエーション的に楽しい方がいい。そんな理由で探してみたら——実際にあったのだ。「情報も」売る快樂宿が。

「好色」などという特徴があるからにはもしやと思っていたら、俺のモノは実際に役に立つものだった。一億人のユーザーの何割かは、これが目的で登録をしているのではないだろうかと自分の事はそっちのけで思う。

アゼリアは変に潔癖な所があって、そういう話をするだけで白い目で見るが、これは健康な男である証だ。行為自体を楽しむだけで妊娠、出産というシステムまでは確立されていないようだ。

「何が知りたいの？」

俺を部屋に招き入れ、グラスにワインを注ぎながら、女が尋ねる。
「君の事が」

その手からグラスとボトルを奪い取るとベッドサイドに置き、彼女のなめらかな曲線に指を沿わせる。

「せっかちな」

「性分なんだ」

近づいて来た女の顔。その唇に深く口づける。

香り玉でも口に含んでいるのだろう。甘い香りが、俺を包み込んだ。

紫煙の匂いが立ちこめた。情事の後のなんとなくけだるい身体を起こすと、シーツを身体に巻き付けた女が煙管に火をつけていた。

「あんだ、良い時に来たね」

そう言って、艶やかな笑みを湛える女。ぞくりとするほど扇情的だ。また、その気になってしまう。

「この街の西の酒場——『青い宝石亭』に、ガイルっていう旅人が来ているわ。その男の依頼を受けると、地図を手渡される。でもそれは、どうやら『エデン』の地図ではないらしい」

「別の世界って事か？」

女をの身体をたぐり寄せ、尋ねる。

「そういう事でしょうね。だから」

そっと、俺の肩に手を回す、女。

「『エデン』では、最後の夜になるかも知れないわね」

「最後にする気はない」

繰り返される、口づけ。

「情報は、まだ全部が公開されたわけではない。でも、今回のイベントでは——何が起こるか解らないわ」

うつとりと告げる、女。その時だ。無粋にも青い鳥が小さく啼いた。

女が、悔しそうに鳥を手取る。

「イベントが更新されたわ。『約束の地へ——今こそ起源の約束が果たされる。約束の大地に集え、冒険者よ』ですって」

「約束の地？」

「それが何処なのかは、イベントを進めないと解らないでしょうね。貴方との時間はここまで。残念だけど、お別れね」

イベントが更新されると、情報屋は忙しくなる。俺だけに時間をかけているわけにはいかないのだろう。

「また、会いに来るよ」

そう言って、部屋を出る。

「ご縁があれば、ね」

女が微笑み、手を振った。

女と別れてから、宿の一階にある酒場に入り浸り、ずっと考えていた。

「青い宝石亭」に居るという旅人。そのクエストを受けると、どこか別の世界の地図を手渡される。では、そこが「約束の地」なのだろうか。そもそも「約束」とは、何だ？

世界は、ひとつではない。

俺はたまたま『エデン』に生まれたので、この世界で生きているが、空に浮かぶ月の数だけ世界がある筈だ。

その世界に生きる者が望んで、別の世界に行くことは出来ない。だが、エデンから強制的に排除されて別の世界に行く事は、とても簡単に出来るのだ。

「ヴァン」

呼ばれて、俺は顔を上げる。いつからそこに居たのか、アゼリアがきつい目で睨んでいた。

「何だよ」

「とりあえず、お風呂に入って来たらどうです？ 香水臭いので俺が何をしてきたかは、すっかりばれているらしい。」

「それから、また降りてきて下さい。話があります」

風呂に入ってさっぱりすると、アゼリアが一枚の地図を差し出した。隣に、今まで使って来た書き込みだらけの地図を並べる。

二つの地図は、全く別のもの。彼女が言いたい事は、あきらかだ。

「クエスト、受けたのか」

「地図を、確認したかったんですよ。でも、てっきりヴァンが先に受けてると思ったんですけど」

クエストはパーティー単位で受けるものなので、俺が先に受けていたらアゼリアは当然受けられない。俺がクエストを受けていなかった事が、アゼリアには腑に落ちなかったようだ。

「バツガードの武具には、銃もあるんですよ」

「ああ。大剣、槍、杖、銃、ネックレスの五種類らしいな」

実は、例のレプリカの話をも初めて聞いた時からアゼリアは、その気になっていたようだ。俺にその銃を、と。

「レプリカとはいえ、性能はオリジナルと同じなんですよ」

「違うのは、耐久度と外見だけらしい」

レプリカ品の耐久度は、九九九回と決まっている。また、レプリカ品には「バツガード」の銘の横にシリアルナンバーが入っている筈だ。

「欲しくないんですか？」

名工の作品。それは冒険者の夢とも言えるものだった。今回、放出されるのがその名工の武具のレプリカ品だという話が出たのは、一ヶ月前。エデンに生きる冒険者は皆、毎日のように新しいニユースを待っている。

「クエストの内容、何だった？」

「この街から北に行った所のヒルズマウンテンダンジョンに居るドラゴンが守る宝を持って、この地図の場所に行けと」

「最新情報では、『約束の地へ』というイベントらしい。ドラゴンの宝を取れば、約束の地への扉でも開くのか？ そうじゃない気がするぞ、あの女の口振りでは……」

「女？」

アゼリアの目が光った。椅子を引いてその場から逃げ出したくなつたが、辛うじて我慢する。

「どういふイベントだか知らないが、どうも嫌な感じなんよ。『COCON』らしくないというか」

強力な武器を突然放出するとか、そういうゲームではない筈なのだ。それも伸ばし伸ばしになっていたので、デマかと思っていいたら、この期に及んでイベントが動き出した。

それが、気に入らない。

「それを、確かめる為にも。私たちには、私たちの冒険譚を待つて

いるマスターがついているんですよ」

アゼリアに促され、俺もやつと頷いた。

そう。何事もやって見なければ解らない。それでも――『約束の地』という言葉には、その後もずっとひっかかりを感じ続けていた。

5 エルドラド

そこは、殺戮の場だった。

一匹の巨大なモンスターが爪を振り上げる。それだけで、重装鎧の戦士の身体がまつぶたつになった。

吹き飛ばされた戦士の亡骸が、鎧の割れ目から血と臓物をはみ出させながら、俺の傍らに落ちる。

そして、俺は——奴の視界に入らないように、アゼリアの腕を掴んで柱の影に隠る事しか出来なかった。

あれは、ドラゴンではない。

少なくとも、俺たちが通常「ドラゴン」と呼んでいたものではない。

俺たちが見たことがある——倒した事もある「ドラゴン」とは、正式名称「レッサードラゴン」というものだ。

邪悪な魔法使いが生み出した、魔法生物。知能を持った蜥蜴を更に巨大化させ、初歩的な魔法を使うようにしたもの。この世界に生まれて間もない頃、俺が殺した「予言者サイフォーン」はその魔法使いの弟子で、彼が連れていたドラゴンもレッサードラゴンだ。

かつて、この世界に存在していた——神とも呼ばれた生き物を模して、人間の敵として生み出された生物。強い個体であっても、エネミーレベルとしては中の上か上の下ぐらいだろう。

だが、今俺たちの目の前にいて、何十人も戦士に囲まれているものは、それとは違う。

俺たちは乗騎を降りて、徒歩になっていた。アゼリアのヒポグリフも俺の軍馬も、ダンジョンに入る手前から進むのを嫌がったからだ。

よほどの敵が待っているのだらうと、慎重に進む俺たちを、何人もの冒険者達が追い越して行った。

「これだけ頭数が居れば、少し安心できますね」とアゼリアは笑

っていたのに。

ダンジョンの最深部で出くわした光景が、これだ。

「全員、突撃！」

ギリギリまで魔力を使って呼び出した召喚獣たちを、一斉にぶつけるのは、召喚士。離れた場所で「弱体化」の呪曲を奏でるバード。魔法使いが魔力が続く限り「魔法抵抗」や「光の盾」「魔剣」などの支援魔法を送り、戦士は全員がSFMを放っている。

だが、どの攻撃も巨大なドラゴンには届かなかった。ドラゴンを覆った影のようなものが揺らぐだけで、ダメージを受けた様子はない。

そして、ドラゴンがうるさそうに口を開けると、炎が舌を出すのが見えた。

咄嗟に左手でアゼリアの手を掴み、駆け出す。

追ってくる、熱気と、すさまじい悲鳴。鉄が溶ける匂い。タンパク質が焼ける匂い。

振り返る勇氣は、俺にはなかった。

ダンジョン入り口まで戻っても、鼻についた匂いはしばらく取れる事はなかった。

「古代龍」

腰が抜けたように、アゼリアがしゃがみこんだ。

当然、ダンジョンの中には雑魚モンスターもうようよ居る筈だ。

だが、それらも主の登場に恐れ戦き、出てこようとしめない。

「だと、思います。でも……」

「強すぎる。あれは、無茶だ」

壁を背に、奥へと続く通路を睨む。

俺たちを追い抜いて行った連中は、数でかかれば何とかなると思っていた筈だ。だが、彼らは俺の目の前で肉塊と化した。そして俺は、何も出来ずに逃げ出したのだ。

武器を握ったままの手が、震える。だがその震えは、恐怖の為だ

けではない筈だ。

人智を超える強さを持つ、モンスター。それだって、ファンタジー世界の醍醐味ではあるだろう。

だがそれを、イベント進行中に倒さなければならぬ相手として出すべきだろうか？ あの一瞬で、何人が死んだのだろう。たった一撃のプレス攻撃だけで。

俺たちはこの世界に生まれ、生きている。冒険者だから、危険な目に会うこともしょっちゅうだが、何とか生き残っている。万が一に死んでしまったら、「復活」だの「蘇生」だのという手段は——『COCOON』にはないのだから。

肉体が死ねば魂だけの存在になり、その世界から排除される。そしてたどり着いた別の世界で、また肉体を得て生まれ変わる事が出来るのだ。

その時に持つて行けるのは、死んだ時に身につけていた装備品と、特別な祝福を受けたアイテムのみ。銀行に預けてある金も、家持ちならば家そのものも、持ち主を失い、やがて消える。

「死」という手段を使つての世界の移動を、『COCOON』は推奨していない筈だし、俺もそれを認める気はさらさらない。

それが何故、イベント進行中に絶対に勝てないモンスターを出して来たのか。何故、『COCOON』の世界観をこんな所で壊すのか。別の世界の地図？ 約束の地？ ふざけるな。

「古代龍だとしても、攻撃が全く通じないのは変ですよね」

アゼリアの言葉がなければ、俺は二度とこの世界に戻つて来る事は無かつたかもしれない。

「SFMの中には、敵の防護点を無視してダメージを負わせるものもある筈なのに」

言われてみればその通りだ。どれだけ生命点が高いにしても、防護点無視の攻撃を受けてダメージが通らないのはおかしい。

「直接攻撃が通らないのか？」

「なのか。むしろ、影」

「影？」

思わず、詰め寄る。おびえたように引く、アゼリア。

「いえ、解らないんですけど」

と、一呼吸置いてから、続ける。

「私が召喚するエレメンタルって、輪郭がぼやけているでしょ？」

あれは別の――私たちが見ることが出来ない世界に居て、精神だけこちらに召喚するものですよ。あのドラゴンも輪郭がおかしかったので」

と、アゼリアが背負い袋の中から例の地図を取り出した。

「もしかしたら、なんですけど。こちらから送り込まれた影なのじゃないかと」

それは、俺が考えたのとは真逆の発想だった。

エデンで死んで、そちらの世界に行くことを強要するわけではなく、そちらの世界から送り込まれたドラゴンを倒す為に、世界を移動するのだという事になる。

だが、どうやって。

「相手のダメージが通るんだから、こちらにも絶対にその力を具現化するアイテムがあるはずなんですよ。それを探しましょう」

そう言ってアゼリアが取り出したのは、黒縁の瓶底眼鏡だった。

レンズの形は円で、しかも顔の半分が隠れるほどのかさだ。

「マジックアイテム感知メガネさえあれば、どんなマジックアイテムも見逃しません」

意気揚々と装着する、アゼリア。

それを使うと、色んな意味で台無しになるからやめてくれと、何度お願いしてもこの女は聞いてくれない。

「マジックアイテムかそうじゃないかを見分けるのは、とても大切な事なんです」

と、言い切られて終わりだ。それは正しい。認める。

だが、見た目も酷いが、そのメガネは装着すると、マジックアイテムだけが見えるようになる。つまり、それ以外は闇の世界になる

のだ。

宝箱を漁っている時でさえ、アゼリアは金属の破片でよく指を傷つけていた。剥き出しの剣があっても気づかないので、いつも手元に気を配らなければならなかった。それを装着して歩くともなれば——どんな被害が出るのか、想像するまでもない。と、思う側から転んでいる。

「ヴァン。ちょっと手を貸してもらえますか？ 出来れば誘導していただけると、嬉しいのですけど」

仕方がないので手を貸しながら——どうでも良い気分になってしまった事を反省した。

転んで、肘に擦り傷を作っているアゼリアだって、ドラゴンに立ち向かって全滅した彼らと同じぐらい真剣なのだと解っていたから。

何時間、ダンジョン内を探索しただろうか。

一度、街に戻った方が良くかなと思った時に、アゼリアがそれを見つけた。

例の深層部近くの壁には、ランタンが埋め込まれて魔法の光を放っている。その中のひとつが、他のものとは明らかに違う輝きを放っているらしい。

壁から外してためつすがめつして見ると、光の中に何かの影が見えた。小さいが——確かにドラゴンの形をしている。

「どうする？」

俺が聞くと、アゼリアは考え込んでいる。

俺たちがダンジョン内を探索している間にも、何人もの冒険者がドラゴンに挑んで——俺の忠告は「臆病者」と誹りを受けただけだった——返り討ちにされていた。

奥の間でまた、悲鳴が響いた。

びくりと身体を振るわせたアゼリアが、覚悟を決めたようにそれを頭上に掲げる。

「何をする気だ」

慌てて、その手を掴む。

「壊せば、ドラゴンは消える。絶対に消える」

真剣な表情で、祈るように呟くアゼリア。その言葉は俺ではなく、自分に言い聞かせているようだった。

「その後で、考えます！」

俺の手を振り払い、アゼリアがランタンを地面に叩きつける。

マジックアイテムなので、そんなに簡単には壊れないのではないかとちらりと思った時には、ガラスの碎ける音がした。

青い光がしばらく明滅していたかと思ったら不意に消え、俺たちの足下に深淵が生じる。

まずいと思った時には、もう遅い。俺たちはその中に、落ちて行っ

た。
真の闇の中を、落ちて行くのかそれとも空に浮かび上がっているのか。それすらもよく解らない。

ここには、何もない。

俺の手を握りしめているアゼリアの手のぬくもりだけが、生きている証のように思われた。俺もまた、アゼリアの手を硬く握る。

その時だ。

突如、光が俺たちを包み込んだ。途端に、身体に様々な感覚が蘇る。一番最初に来たのは、重力。大地に足をついて、身体を支えているという感覚だ。

「このタイミングで来るか！」

真横で誰かが悪態をついた。まだ、状況が解らない。

顔を上げると、金色に光る何かが視界いっぱいに広がった。と、同時に身体が動く。

黄金色に輝く鱗を持った巨大な生き物に向かって、フルチャージの銃口をつきつけ、撃つ。青い光の束がドラゴンを射抜いた。直撃だ。

「必殺の一撃」。全魔力を使って、一撃を放つ。当たれば相手の核を傷つけて死に至らしめる。注）生命点が三桁以上のエネミーや、特殊な敵に対しては、その生命点を八〇パーセント減らすに留まると、マニュアルに書いてあったその技を放つ。

S F Mを放ったのはまだ二度目だが――前のように意識を失う事はなかった。豎琴の音が聞こえたので、アゼリアの呪曲のおかげだろうと推察する。だが、それでも立っているだけもきつい。

その俺の身体が、強く引かれた。アゼリアだ。勢いで数歩、後退する。

と、さっきまで俺が居た場所に大量の血と肉片が落ちて来た。血を吸った地面から、嫌な匂いの煙が上がる。

「危ない、です」

古代龍の血には、酸が含まれているらしい。だが、身体がまともに動かない状態では、避ける事も出来ない。奴は、怒りの目で俺を睨んでいるというのに……。

「こちらへ」

白銀の手甲が俺に肩を貸してくれた。見ると、それは全身に騎士鎧を纏い、首に聖印をかけた人物だった。

彼が触れたとたんに、少しだけ目眩がおさまる。

「やるなあ」

へろへろな俺を振り返り、歯を見せて笑ったのは黒い鎧の男。どこかで見たことがあるような気がした。

「だが、まだ生きている」

俺に肩を貸してくれている白銀の騎士鎧が、言った。

「黒炎、止めを！」

「勿論だ！」

黒鎧の男の大剣が、ドラゴンに深々と突き刺さる。そこから、強大なエネルギーが溢れた。

ドラゴンは最後に咆哮を上げ――それだけで、地崩れがした。俺は再び誰かの手でいつの間にかアゼリアが召喚していたヒポグリフ

に乗せられる。

脳裏に何かが聞こえた。いつもの潮騒かと思ったが、少し違う。

「出たか？」

そう言ったのは、騎士鎧の男。

「いや。俺じゃないな。あんたか？」

黒い鎧の男が俺を見る。

「それより、早く離れなきゃ。主戦力がへろへろじゃん」

誰かがそう言って、

「でも、まだ宝が……」

控えめに告げたのは、アゼリアだろうか。

「そんな暇はない。イベントモンスターだから、すぐに湧くぞ」

その後の事は、よく覚えていない。

気がつくと、俺たちはダンジョンを脱出していた。繋いでおいた

筈の軍馬がいないので、聞いてみる。

「何だ、気がついてなかったのか」

と、黒鎧の男が笑って言った。

「久し振りだな、ヴァンヘイル。——ようこそ、エル ド ラドへ」

6 レプリカのロッド

「お帰り。黒炎にエリ阿斯、グリンダ、シュウ」

黒炎が案内した宿に着くと、飛び出して来た少女が労いの声をかけて回る。俺と目が合うと、彼女はにやつと笑った。

リンコ。黄色い鳥を肩に乗せた少女。俺が初めて『COCOON』エルドラドで出会った人間だ。黒炎が居るという事は、彼女もこの世界に來ているだろうとは、思っていた。

「お久しぶり、ヴァン。ちゃんと、生き残ってるね。で、そちらの綺麗なお姉さんはお仲間？」

「アゼリアです。仲間というより、足をひっぱっているというか…

…」

「いや、暴走キャラの歯止めだろ？」

俺にそう言われて、アゼリアは嬉しそうだ。別に、彼女を誉めたつもりはないのだが。

「アゼリア——躑躅ね。素敵な名前」

リンコは、まるで何かを懐かしんでいるような顔をした。じつとアゼリアを見つめ——小さく首を振る。

「あの？」

「ごめんなさい、知り合いみたいな気がしたから。さて、エリ阿斯、グリンダ、シュウ。お疲れさまでした。また、何かの時には宜しく」

聖騎士のエリ阿斯達が、金を受け取って部屋を出る。彼ら三人は黒炎とパーティを組んでいるわけではなく、古代龍討伐の為に雇われたのだと聞いた。

「しかし、あんたらもよほどの強運の持ち主だな。よりによってあのタイミングとは」

彼らの姿が消えると、苦々しく黒炎が呟く。それは、俺たちが俺たちがこちらにたどり着いた時に聞いたものと同じ言葉だった。

「さっきも聞いたな。それは、どのタイミングだ？」

大きく嘆息する、黒炎。

「古代龍ってのはな、一撃で簡単に人間を殺せるんだ」

それは、知っている。エデンのダンジョン深層部で見たあの地獄のような光景は、未だ脳裏に焼き付いているのだから。

「そいつを、四人がかりで時間をかけて弱体化させて、一気に俺がSFMで生命力を削り、仕留め損なったらエリアスが止めをさす予定だった。だから、大枚を叩いてあの三人を雇ったんだ」

なるほど。言いたい事が解った。

トンビに油揚げ、というわけだ。

「でも、出たんでしょ？ シリアルナンバー001が」

事情を知らないリンコが、更に黒炎の傷口をえぐるような事を言い、黒炎が不機嫌そうに窓辺に背もたれる。

小さく首をかしげたリンコが、また何かを口にするより前に、

「そんな事まで、ニユースになるんですか？」

アゼリアが何気なく話題を変えた。

「あたしとインコは、どんな小さな情報も逃がさないのよ」

黄色い鳥の喉を人差し指でなぞりながら、誇らしげに答える、リンコ。

「黄色いメッセンジャーバードなんて、初めて見ました」

それは、俺も前から不思議に思っていたので、今度会うことがあれば聞くつもりだった。情報屋が連れているメッセンジャーバードの色は、通常は青なのだ。

「あたしのインコは特別製。知力にプラス2の修正があるのよ。あたしと同じぐらい、賢いんだから」

賢さで鳥に負けている俺は、一体何なのだろう。以前、同じようなことをアゼリアにぼやいてみたら、「『知力』が高くてもお馬鹿な私は何なのでしょう？」という返事が返って来た。「それはお馬鹿とかじゃなくて、粗忽なだけだろう」という事に落ち着いたが。

「メッセンジャーバードの能力は、自分の能力の一部なんですよ？ それだけのプラス修正をつけたりしたら、リンコはマイナス修正

だらけになりませんか？」

「ええ。ソフトレザー鎧を着る体力もありませーん。ご飯を一食抜くともう立ち上がれないし、百メートル走ると目眩がするし……ギリギリで生きてる感じ？」

それでよく、旅に出ようなどと思ったものだ。

俺が小さく嘆息して、アゼリアがぷつと吹き出した。その時だ。
「俺じゃない」

低い声で、黒炎が呟いた。

はあ？ と、リンコがそちらを見る。

「何が？」

「だから、シリアルナンバー001だよ」

苛々と頭をかきむしる、黒炎。顔を上げた彼と目が合ったので、荷物の中から短いロットを取り出す。

それは、いつの間にか銀行に預けられていたものだ。また、空のはずの口座にはとてつもない賞金が入金されていた。

トンビに油揚げの結果だ。

古代龍が絶命した時に聞いた声は、「偉大な冒険者にアイテムが与えられた」というものだったらしい。その時はそれどころではなかったのだが、落ちていて考えるとなるほど、そのような台詞だったかも知れない。

このロットこそバツガードの武具のレプリカ。シリアルナンバーは001だ。つまり、これがイベント初のレプリカ品だという事になる。

「これが、それなの。オークションに出したら、何億っていう値段になるよ」

俺が取り出したロットを手に取り、しげしげと眺めるリンコの目がきらきらと輝いた。

「レプリカだろ？」

「何を言ってるんだか。シリアルナンバーの、001よ。オリジナル品が存在するのかどうかも解らないんだから、武器としてよりも

装飾品としての価値が高いだろうね。ロッドっていうのが、ちょっと地味だけど……それでも、ものすごいレア。残念だったね、黒炎」

よほど興奮しているのだろう。一息でまくしたてる、リンコ。

「やかましい。俺は、装飾品とかオークションに出すとか、そんな事の為に欲しかったわけじゃない」

「じゃあ、武器として？　だったらシリアルナンバーにこだわる必要なんかないじゃない。何を拗ねてるのよ」

「こだわっているのはそこじゃない」とか何とか、黒炎がぼそぼそと呟いている。初めて会った時にも思ったが、この二人はどういう関係なのだろう。

どうにも、リードしているのはリンコのような気がするが。

「はい、はっきり言う！」

「——止めをさしたのは俺だ」

黒炎が叫び、リンコはしばらく目を見開いていたが——やがて、吹き出した。ツボにはまったのか、そのまましばらく笑い続ける。

「大体、『必殺の一撃』は卑怯なんだ。当たっただけで簡単に大ダメージってのは、ないよな。『光気斬』は、剣を深々と突き刺さなければならぬし、その為にはエネミーに切迫しなきゃいけないんだぞ」

黒炎の言い分は解らないでもないが、卑怯呼ばわりされては、さすがに黙ってられない。

「全マナを込めたその一撃を外すと、目も当てられないんだが」

「はい、黒炎の負け」

まだ笑いが止まらないリンコが、苦しそうに告げる。

「武器によって利点が違うのは当たり前。黒炎が止めをささなかったら、ヴァンは多分やられていただろうし……あ、ごめん」

最後の言葉は、俺ではなくアゼリアに向けられたものだ。「いえ、事実ですから」と悪びれもせず答えるのが、アゼリアの良い所だと思う。

気を取り直して、ずっと気になっていた事を俺は口に出した。

「ところで、あんたらは何でエルドラドに居るんだ？ 俺たちが行く前からここに居たんだよな？ それは、イベントが更新される前からなのか？」

「そこは、まあ人に言えない方法で……」

「黒炎、余計な事は言わない！」

リンコに睨まれて、黒炎はまたばりばりと頭を掻いた。

「ああ、面白くない。俺、下で飲んで来るわ」

「はいはい、行ってらっしゃい」

軽くあしらうリンコを睨んで、黒炎は苛立たしげに部屋から出て行った。

やれやれと、リンコが肩をすくめる。

「ごめんね、せつかくの再会なのに」

「いや、実際に横取りしたわけだし……実は悪いなとは思っているんだが、『別にいらないからどうぞ』では黒炎に対して失礼だろうし」

俺だって「名工の武器のレプリカ」については、色々考える所があるし、そもそもこいつは俺にもアゼリアにも不要なものだ。

「それは、無茶苦茶失礼だと思いますよ。だから、良ければリンコが預かっておいてもらえませんか？」

さすが、アゼリアは良いことを言う。

「凄い価値があるものだって、さっき言ったよ」

逆に、呆れたように俺たちを見る、リンコ。

「そうそう、気になっていたんですけど。オリジナルが存在しないかもしれないって？ 『起源の冒険者』は、ただの設定だっていう話ですか？」

伝説に伝わる「起源の冒険者」とは、この世界を発見した五人の冒険者の事だ。それはイコールこの世界の構造を造った者だという夢のない説が通論となっている。つまり、『COCOON』が販売される前からこの世界に携わっていた、五人のGMだと。
ゲームマスター

そもそも、これらの五人がどのような能力を持った冒険者だった

のかすら、このイベントでレプリカの内容が発表されるまで解らなかったのだ。

リンコが、大きく息を吐く。

「伝わっているのは、呼び名だけ。ランド、ソルダム、ベル、ミヤマ、そしてコクーン」

「コクーン？」

聞き返されて、リンコが慌てて口を押さえる。「これは、もしかしたらトップシークレットだったかも」と、もごもご言っている。

『COCOON』には、「キャラクター名として使ってはならない言葉」が存在する。先ず、ゲームのタイトルである「コクーン」。他にはハラスメント用語など。

キャラクター名に「コクーン」を使ってはならない理由は——多分、『COCOON』のイメージを壊す者に使用されては困るからだろう。第一、混乱の元だ。

「知っていた？ コクーンでも、こくうんでも、勿論COCOONでも、登録が出来ないのよ。呼び名とはいえ、そんな特別な名前の人が普通のGMとは思えない。他の四人とは、明らかに待遇が違うよね」

トップシークレットかも？ と言いながらも、饒舌にリンコが話す。まるで、秘密をみんなで分け合いたい子供のような顔つきだ。だが、それはすぐに哀しくしぼむ。

「その、『起源の冒険者』がクローズアップされても、伝説の武器とか出てきても。あたしとしては、「装飾品」に落ち着くだろうと思っていたんだけど。黒炎の考えはちよつと違うみたい」

黒炎の出たいった扉を、恨めしげに見つめる、リンコ。

「リンコは、ただの装飾品にしたかったんですね」

アゼリアが、そんなリンコに言う。

「だから、わざと黒炎の前であんな事を言っただんじゃないかって……ごめんなさい、余計な事ですよね」

リンコは、笑って首を振った。

「不思議。アゼリアは黒炎の気持ちが解っているみたい」

「まさか」と、アゼリアがぶんぶん首を振る。

それっきり、誰も何も言わない。俺としてもリンコに言いたい事、聞きたい事は沢山あった筈なのだが……そう言えば、次に会う事があれば必ず文句を言うつもりだったのに、まだ言っていない。それどころかその頃の事が、今では笑い話として話せそうな雰囲気だ。

「そろそろ、落ちますね」

やがて、アゼリアが言った。

俺の方も、耳鳴りが強い。そろそろタイムリミットだ。

「じゃあ、ベッド使う？ 隣は黒炎の部屋だけど、そっちも使って良いよ」

「ではお言葉に甘えて」

と、アゼリアがベッドに向かう。

「では、またエデン……違った、エルドラドで」

「良い夢を」

そう答え、俺は隣の黒炎の部屋に移動した。ベッドに横になり、ログアウトを待つ。

意識が途切れる瞬間に、どこか遠くで会話が聞こえる。隣の部屋でアゼリアとリンコが話しているのかと思ったが、どうやら違うようだ。

（あのね、死んだら、どうなるの？）

（とても綺麗な場所に行くんだよ）

（綺麗な場所？ お花が咲いてる？）

（そうだね。そこで、ずっとは幸せに暮らすんだ）

（この間、——に写真を見せて貰ったよ。ロープウェイで行ける場所にね、薄紫のツツジがいっぱい咲いているの。山の斜面が全部薄紫色で、とっても綺麗だった。来年の花の時期に、連れて行ってくれるって）

（じゃあ、それまでにもう少し元気にならないといけないね）

（貴方も一緒に行くのよ。だって——は、私を守ってくれる戦士なんだから）

あどけない少女の声が、遠ざかる。

胸が痛くなった。

これは、誰の記憶なのだろう。システムによって造られた俺の記憶なのか？ それともあちらの世界で生きている「自分」のものなのか？

解らない。解っているのは、彼は約束を破ったと言うことだ。そう、彼女はひとりぼっちで旅立ってしまったのだから。

どちらにしても、彼女がリンコの筈がない。なぜなら彼女は、もう……。

――――

「先生、おかえりなさい」

目を開けるといつものように桐島が迎えてくれる。やれやれと、私は溜息をついた。

「少しは、余韻に浸らせてはもらえないのか？」

「ああ。すみませんね、気が利かなくて」

ヘッドギアを取り外した私の前に、熱い紅茶が置かれる。『COCON』へのログイン時間は順調に長くなっており、最近では一日三時間程度をあちらで過ごせるようになっていた。

「ところで先生」

桐島の声には、緊張の色が見られた。何事かと、彼を見る。

言いくそうに何度か口ごもった後で、「大地の事なんですけど」と、桐島が告げた。

私は多分、嫌な顔をしていただろう。その男の話はしたくないし、聞きたくもない。というのが本音だったから。

「ちよつと気になることを聞いたので」

「君のご友人の話を、わざわざ私に報告する必要はない」

はあと、大きな溜息をつく、桐島。

「だったら何故、先生は『COCOON』にログインするんですか？」

その質問には、答える気はなかった。顔を背けた私の目の前に回り、更に桐島がたたみかける。

「解っていたんじゃないんですか？ あいつが『COCOON』のメインプログラムを担当していた事を」

勿論、知っていた。だから、最初は興味が湧いたのだ。あの男が、どんな世界を作ったのか。

私から大切なものを奪ったあの男が、今でも後悔しているのか。

「どう思いましたか？ あの世界を」

「結局、既存のオンラインゲームと同じだよ。というか、多くのユーザーの期待を裏切らない為には、そうするしかなかったんじゃないか？」

「だからでしょうね。大地は、企画から外れました。今日、知ったばかりなんですけどね」

「そうか」

そんな気がしていた。

無茶なイベントや、強力なアイテム。彼が望んだ世界に、そんなものは必要はない筈だから。

「所詮、そういう男だよ。会社に所属しているのだから、方針には従わざるを得ない筈なのに——ちよつと、嫌なことがあるとすぐに逃げ出す」

「それだけ、思い入れのある世界だからですよ」

「だったら、何故それを商品として売り出した？」

桐島は、答えない。当たり前だ。当事者でもない桐島に答えられる訳がない。

「すまなかった。八つ当たりだ」

「いえ。それより今の言葉は、大地本人に言ってやってもらえませんか？」

「何故、私が？」

「先生の言葉なら、あいつに届くと思うんです」
馬鹿馬鹿しい。

「ありえんよ」と、私が答える。

「私と彼とは、延々と続く平行線の上に存在しているのだよ。桐島くん」

桐島は、とても哀しそうな顔をした。

彼は、悪くないのに。いつも貧乏くじを引いているだけの桐島が少し哀れになって、別の話を向けてみる。

「それより、君はどうなんだ？ あちらではやはり、口うるさい老人を演じているのか？」

「まさか。口のへらない小娘ですよ」

いつもの調子を取り戻した桐島の返事に、笑って見せる。

「では、その小娘とは会わないことを祈るよ」

7 女神の死（前書き）

2011.3.28 7章以降を大幅加筆修正致しました。
やっと読み返す勇気が湧いたとも言います……言葉足らず、描写不足。大変、失礼いたしました。

7 女神の死

赤い髪に顔を寄せると、彼女の匂いがした。

この世界に生まれて間もない時から、ずっと一緒に冒険をしてきた女。時には頼れる仲間であり、また時にはとんでもない粗忽者であつたり。それでも、一緒に居ると安心出来る存在になっていた。

そのアゼリアを、俺はその日、抱いた。

「何で、いきなりそういう気になったんですか？」

想像に反して、アゼリアは大げさな拒絶をしなかった。一番最初に顔に一発キックをもらっただけで——明日になれば目の回りに青タンが出来ていそうだが、そんなことはたいした問題ではない。ヒットしたのが口でなく、歯が折れなくて良かったと、心からそう思っている。

「俺だつて男だ」

「知ってますよ。しかも、女好きでしょ？」

ほんのり紅潮した白い肌が、とても魅力的だ。出会った時から、惹かれていた。ただ——アゼリアが言う「そういう気」にならなかったのは、彼女を「仲間」以外の目では見ないように勤めていたからだ。

最初に設定した「不利な特徴」に「好色」を選ぶと、魅力的な異性を見るとそれが顔に出る。仲間を相手にそうした反応をするのは、どうもいただけない。

だが、俺は彼女を抱いた。

「アゼリア」

名を呼ぶと、彼女の目が俺を見る。

「なんですか？」

「決めた。黒炎とは、一緒に行かない」

少し驚いたように、アゼリアが顔を上げた。茶色の目が不安げにける。

例の地図は、この「エルドラド」のものでもなかった。ならば、「約束の地」はまた別の世界にあるのだろう。

黒炎やリンコたちと共に行けば、探求の旅も楽になることは解っていた。リンコに、「どうせなら、一緒に行かないか」と誘われもした。

「別に、二人を敵に回すつもりはないよ。ただ、俺は俺のやり方で行こうと思う」

黒炎と俺との間に出来た軋轢は、一緒に酒を飲むとすぐに消えた。例のレプリカのロッドだけではどうしても受け取りそうにないから、結局リンコに預けた。

一緒に飲んで、話を聞いて。黒炎がえらく理想家なことを知った。「そもそも『COCOON』は、アイテムラッシュになるようなゲームではない」と力説していた、黒炎。話が合うなと思った。——だからこそ、彼とは距離を置くべきだと俺の中の何かが告げた。

これは、俺の意地なのだろう。
「賛成です。ヴァンは自分がやりたい事をすれば良い。私も、それについていきます」

当たり前のように言う、赤い髪の女。出会った時からずっと、当たり前のように側に居た女。

だから。

彼女の身体を引き寄せ、その耳に口を寄せた。

「アゼリア」

小声で囁く。

「だから、どうしたんですか？」

「お前、どうして、俺と一緒に居るんだ？」

しなやかな体躯が、強ばったのは一瞬。
すぐに形の良い唇が、笑顔を作った。

「今更、何を言い出すんだか。仲間じゃないですか、私たち」
からかうような、口調。だが、先ほどの強ばりが全てを裏切っていた。

そう。俺たちはあの日、偶然出会い、共にモンスターを倒して、その後放浪して――仲間になった筈だ。だが、どうしても納得がない事がある。

「古代龍の血が毒だと、何故知っていた？」

「図書館で調べたんですよ」

今度はまるで用意していた答えを口にするかのように、滞りなく答える、アゼリア。

「手際が良すぎると思わないか？」

「そうですね？ 私、モンスターの事は常に調べるようにしているんですよ。冒険者として」

俺は、小さく首を振る。アゼリアと一緒に冒険をしていて、楽しかった理由は。

彼女がいつも「先ず、欲しいものあり」という姿勢だったからだ。その為に、いろいろ調べてもいたのを知っている。「どうしても、手に入れておきたいんです」と、寄り道をさせられることは、しょっちゅうだった。

だが、伝説の「古代龍」などという昨日までは実現していなかった存在の事を、わざわざ調べるだろうか？ また、エデンのダンジョンに現れた古代龍が「違う世界から送られてきた影」という彼女の推論は、見事に図星だった。アゼリアが見つけたマジックアイテムは、「エデン」と「エルドラド」を繋ぐものだった。それらは、本当に偶然なのか？

一度疑い始めれば、彼女の言動すべてが嘘に思えて来る。

「出会ったのも、偶然か？」

「当たり前でしょう？ どうやったら仕掛けられるんですか？」

「犯罪者だと知った後、俺を何故助けた？」

ついに、アゼリアは大きな溜息を吐いた。

「あのね、ヴァン」

「お前、ゲームマスターじゃないのか？」

その言葉に対する反応は、いつものアゼリアのものだった。

呆氣にとられた顔をして、言われた言葉を理解しようと首をかしげ――それから、首を振る。

「そういう意味では、ただの冒険者ですよ」

「そういう意味」とはどういう意味だと俺が問う前に、アゼリアは真顔になり、正面から俺を見た。

「だったら、私も聞きますけど。ヴァン、あなたは どうしてバツガードの銃を持っているんですか？」

俺は、驚かなかった。やはりな、と思ったただけだ。

「やはり、最初から知っていたのか」

まさかと、アゼリアが笑って首を振る。

「それなら、もっと上手にやりますよ。レプリカの情報を知った時です。言ったのは、あなたですよ。銘が入っていると」

そう。本物とレプリカ品の違い。銘の横にシリアルナンバーが入っているのがレプリカ品だと、彼女に説明したのは俺だったか。

「そんなもの、文字が読める人間なら、最初から解る筈だろう？」

「バツガードはドワーフですよ。私はドワーフ語は読めません」

「そうだったな」と、俺は呟く。

『COCOON』では、文字を扱えるのは人間だけではない。エルフやドワーフ、神秘生物と呼ばれるガーゴイルの上位種なども個々の言語や文字を持っている。

「レプリカに対して全く興味を持っていなかったようなので、かえって気になったんです。優れた武器に興味を持たない戦士なんて、考えられないから」

そう。その武器を俺は初期装備として持っていた。だから、別の――高品質と呼ばれる武器を試して見るまでは、それが「特別なもの」である事にも気づかなかった。

その、「バツガードの銃」と呼ばれる武器を取り出す。

黒い銃身を持つそれはかなり重量があり、筋力にプラス修正がある者しか扱えない仕様になっている。

「多少、攻撃力が上がったりマナの消費が少なかったり、その程度

だ。そんなものは探せばいくらでもあるさ。ただ、こいつの最大の特徴は、何度使用しても壊れない事。祝福を受けたアイテムだから、俺が取りだした武器と俺を見比べ、

「ヴァンヘイル・ソウルダム二世。あなた、何者？」

アゼリアが、低い声で告げた。

俺は笑った。どんな顔で笑ったのだろう。さぞ、自虐的な笑みを浮かべていたのではないだろうか。

「名前の通りだよ。俺は、ソウルダム——ソルダムと呼ばれた戦士の息子という設定だ。まさか、初期装備にそのソルダムの形見が入っているとは思わなかったが」

「起源の冒険者の子孫」。冒険の間に知ったのだが、プレイヤーキャラクターの中にはけっこう居る。だが、今まで出会った者の中では百パーセントが騙りだった。どうして、俺だけが他と違うのかは解らない。GMに出会う事があれば、是非聞いてみたいと実はこっさり思っていた程だ。

アゼリアの顔が、間近に迫った。彼女の唇が触れると、俺はそれにむしゃぶりつく。

「四人で冒険ていうのも、有りかと思っただけですけどね」

深いキスの後でアゼリアが告げたのは、今までの流れを断ち切るものだった。

「夢は、所詮夢ですね」

何のことだと言う俺に、アゼリアが悪戯っぽく微笑む。

「でも、パーティは解消しませんよ。確かに、私はヴァンに黙っていた事があります。でも、まだ確定したわけじゃないから、それを知るのをお互いの為にならないと思うんですよ」

そう言った後でアゼリアが小声で——それでも俺に聞こえるように「リアル世界の事をこちらで口にするのは、厳禁ですし」と呟く。それを聞いて、何というか——微妙な気分になった。

だから、この件については追求するまいと心に決めたのだ。好色けだものの勘というやつだ。ただ、その勘がもう少し早く働いていたら、俺

はアゼリアを抱かなかったかも知れない。

初めて会った時から、魅力的だと思っていた赤い髪の女を前に、俺はそう思った。

腕に装着した通称「無線機」が光った。アゼリアからの連絡だ。

現在、『COCON』は一ヶ月前から比べると見る影もない程の様変わりをしていた。イベント中の特別措置とやらで、様々な場所に異世界に通じる穴がもうけられており、それを使えば即座に世界移動を出来るようになっていた。

イベントを進める為のヒントが、あまりに解りにくいという苦情が殺到しての措置らしい。

それに関しての愚痴は、全部アゼリアや酒場のマスターにこぼし済みだ。その穴を通って、俺たちは「エデン」に戻っていた。

何が起きているのか、何を起こそうとしているのかを知るために。その為には、エデンの「冒険者の村」で情報を集めるのは有効だったし、例の「無線機」がとても役に立った。

（イベントが更新されました。ついに、道が開かれます。アルトの「タコとかぼちゃ亭」で待っています）

アルトと聞いて、とても懐かしい気持ちになる。

そこから始まるべき冒険をすつとばして、更に犯罪者の烙印を押されて逃げ出した街。

すっかりトラウマになっており、その街にだけは足を踏み入れた事がなかったから。

「あ、来た来た」

タコとかぼちゃが描かれた妙な看板をくぐると、アゼリアが嬉しそうに手を振る。

「最初に会った時から、食べさせたかったんですよ。ここの名物のカボチャコロッケと、タコヤキ」

進められるままにコロッケを手に取り、思い出した。

「イベント更新じゃなかったのか」

「ですね。でも、熱いうちに食べた方が美味しいですよ、それ」
更に促されたので、食べる。

美味かった。

「これで、やっとヴァンに恩返し出来た」

大きく伸びをして、そんなことを言い出す、アゼリア。

「恩返しって…… お互い様だろ？」

「いいえ、これは私のけじめですから」

アゼリアお勧めの屋台料理を満喫した頃、店に居た情報屋が「イベント更新」の速報を叫ぶ。

「おい？」

「シリアルナンバー097が出たので、そろそろかと思って」

そう言ってアゼリアが取りだしたのは、大剣だった。

「ひとりで？」

「まさか」と、アゼリアが首を振る。

「お誘いがあつたから参戦して、おこぼれに預かっただけです」

最近では、ソロプレイの冒険者がボス戦の為に仲間を募ることも多い。そういう即席部隊に合流したのだろう。

「ファーストダメージを出さないと、出ない筈だぞ」

「そこは、無茶苦茶がんばりました。ぐりちゃん達が」

そう言って、目を伏せる、アゼリア。

彼女の手首に飾られた召喚クリスタルが、全て光を失っている事にやっと気づいた。

「銃を出したかったんですけど、こればかりは仕方ないですよ。ね。これで、5/100の確立です」

そう。例のレプリカの放出は合計百個を上限としていた。提示されたエネミーを倒した所で、アイテムが出る確立は——世界移動が容易くなった時点で、1パーセントに引き下げられている

すべて、開発者の都合と、ユーザーの希望。

そんな文句も言い飽きていたのに……

「俺は」

「行きましょう。でないと、後悔しますよ」

「でも、それは」

「受け取ってくれないと、泣きますよ」

俺はアゼリアを抱きしめ、大剣を手に取った。

そして、向かう。定められた場所へ。

アルトのすぐ側。

はじまりの場所に設置された舞台に、ひとりの人間が立った。

「『エデン』の皆様、初めまして。GMのジャンヌです」

濃紺色のローブは、世界の秩序を保つために存在する、GMのあかし。だが、俺が会うのは初めてだ。

GMは、普通はプレイヤーキャラクターの前に出る事はない。今回の彼女も影がない所を見ると、本体ではないのだろう。

「今、私たちの前で約束が果たされようとしています。って、ニユースを聞いて来た皆様は、解っている筈ですよ。この『COCOON』を創造した女神が再び降臨するのです。新しい世界を産み出す為に」

笑ったのは、集まった群衆の中で、きっと俺だけだっただろう。

これも、開発者とユーザーの都合。『COCOON』は新たなユーザーを受け入れる為に「世界」を増やさなければならぬ羽目に陥った。

そんな都合をゲームに組み込んだのが、この「約束の地へ」というイベントだ。以前より利用していたユーザーが「新しい世界の創造」に参加すれば、その満足度も高まると踏んでの事だろう。

「この時に選ばれた皆様は、その世界が生まれる瞬間を見る事ができるのです。その世界の名は、シャングリラ」

ジャンヌが大げさに両手を広げる。

わざとらしいどよめきと、拍手が起った。そんなことは解ってい

るが、ここでどよめくのがRPGの醍醐味だ。

サーバーの負荷が少なければ、世界は次々と産み出されるのだろう。だが、このイベントは一度しかない。女神の降臨は、一度で良いのだ。

「女神を呼び覚ますことが出来るのは、選ばれた者のみ。喜んでください。エデンからもひとり、その勇者が出るのです」

再び、拍手。あちらこちらから、ときの声まで上がる。ジャンヌは満足そうに頷いた。

「皆様、ニユースは聞いて来ましたか？ 選ばれた人はそのアイテムを失います。失うのが惜しい人は、立ち去ってもらっていいですよ」

去る者はいない。

「では、選定された人は、アイテムを女神に」

ジャンヌが右手を挙げると、空間が僅かに歪み、そこからカプセル状のものが出てくる。

そこで眠るようにしているのは、ひとりの少女だった。胸をわし掴まれた気がした。

カプセルの中で、あどけない顔をして、眠っているのは……。

「かつて、女神に導かれて人が住める世界を探し求めた冒険者が居ました。みなさん、知っていますよね。起源の冒険者たち。そして彼らと共にあって彼らを導いていた女神。ここに居るのが私たちの女神、サーヤ・コクーン！」

立ちつくした俺の脳裏に響き渡るような、ジャンヌの声。

それに重なる——遠い、囁き。

（ソルダムも行くのよ）

（だって、ソルダムは私を守ってくれる戦士なんだから）

激しい目眩に襲われて、俺は隣に立つ女の肩を掴んだ。白い手が、そつと俺の身体を支えるように回される。

アゼリアを見ると、彼女の茶色の目が俺を見ていた。その視線が右手——手にした剣に注がれたので、そちらを見る。

アゼリアに託された剣が、白い輝きを放っていた。

「二人？ エデンには二人も？」

GMのジャンヌが、不思議そう俺と、そしてもうひとりを見た。輝くロッドを手にしているのは、黒炎。エルドラドから、エデンに戻って来たのか？ 何の為に？

だが、そんなことを聞ける状況でも——考えられる状況ですらなかった、剣に導かれるように俺の足がふらふらと前に進む。まるで別の意志がそうさせているように。

大剣、杖、槍、銃……約束のアイテムが女神に捧げられる。だが、どんなに待っても、女神は目覚めない。

「ペンダントがないぞ？」

誰かが言った。

「ペンダントを出した奴はいないのか？」

そうだ。約束のアイテムは五種類。ペンダントがない。

黄色い鳥を肩に乗せた少女が前に出る。リンコは、インコを手に取った。それは、緑色の石を埋め込んだ小さなペンダントに変わる。それは。

翡翠はお守りになるからと。中に入った不純物が、あの子が好きな鳥に見える……。

「やめろ！」

叫んだのは、俺ではなかった。

「こんなものは、まやかしだ」

リンコを阻止せんばかりに、剣を抜いたのは、黒炎。

「そこに居るのは、コクーンじゃない！」

いつのまにそこに居たのだろう、アゼリアが俺の手を引く。だから、俺は動けなかった。

動けない俺の目の前で、カプセルが姿を消した。リンコが差し出したペンダントがふわりと浮かび上がり、少女の胸元を飾る。少女の瞼が、かすかに動いた。ゆっくりと、開かれた。

淡い色の瞳。何にも染まらない、純粹な色。

「もう、やめよう」

剣を抜いた黒炎と少女の間に立つリンコは、泣いていた。

「もう、やめよう。どうしたって、あの子は帰って来ないんだからアゼリアの手を除ける。少し躊躇するように絡みついていた白い手をもう一度払いのけると、彼女はそれ以上は何も言わなかった。

アゼリアが一步後ろに下がったのを知って、俺は自分の武器を手にとった。

「その子はコクーンじゃない。こんな歪んだ世界が、COOCOONであるわけがない！」

黒炎が、震える手で剣を振り上げる。

ちらりとジャンヌを見てみれば、彼女は小さく肩をすくめただけだった。普通に、ゲームの中に存在する武器で、傷つける存在ではないのだろう。

ジャンヌは、知らない。想像しようとしてもしない。黒炎の剣がおそらく、祝福を受けたアイテムであろうことを。

「その歪んだ世界を造ったのは、君だろう？」

振り返った黒炎は、とても哀しい顔をしていた。

彼が、その剣を振り下ろせるわけがない。だから。

「君がが終わらせないならば、私がやる」

黒炎と少女の間に入り、俺は――引き金を引いた。

目を覚ましたばかりの少女が、不思議そうに俺を見ている。

暗い部屋に差し込んだ、一筋の光。彼女はそんな存在だった。

（あのね、死んだら、どうなるの？）

そう言われて、とても驚いたものだ。この子はこんなに幼いのに、自分がいずれこの世を去る事を知っている。

気がついている。

（とても綺麗な場所に行くんだよ）

（綺麗な場所？ お花が咲いてる？）

（そうだね。そこで、ずっとは幸せに暮らすんだ）

頷くと、彼女は屈託のない笑顔を浮かべて一枚の絵を取り出した。クレパスで描かれた、薄紫の花畑。

（この間、桐島さんに写真を見せて貰ったよ。ロープウェイで行ける場所にね、薄紫の花がいっぱい咲いているの。山の斜面が全部薄紫色で、とっても綺麗だった。さやも見たいって言ったら、来年の花の時期に、連れて行ってくれるって）

泣くな。泣いたら知られてしまう。

この子が、「次の桜は見られない」と宣告された事を。

（じゃあ、それまでもう少し元氣にならないといけないね）

（おじいちゃんも一緒に行くの。だってソルダムは、さやを守ってくれる戦士なんだから）

（ソルダム？）

さやが、スケッチブックをめくる。

そこには某ファンタジー系ゲームのパッケージを真似して書いたような絵が描かれていた。

真ん中に立っているのはネグリジェのようなドレスを着た女の子。その隣には小柄な少年と、魔法使い。そして、背後には二人の戦士。（さやの物語。戦士のソルダムはね、最年長だからすごく物知りで、そして強いのに）

（では、ソルダムはいつまでも姫の傍らにいるよ）

嬉しそうに、さやかが笑う。

（あとね、いつもさやの面倒を見てくれる優しい魔法遣いが、ミヤマ）

（ミヤマ？）

いたずらっ子のような目を、さやが向けてくる。少し考えて、思いついた。一枚目の絵に描かれていた薄紫の花。

（ミヤマキリシマ？）

（当たり前）

楽しそうにけらけらと笑う、少女。あの人の良い小太りの男が聞けば、さぞかし喜ぶだろう。

（ベルはね。さやが見れない世界を旅して、教えてくれるのよ）

ベルは、さやが飼っている猫だと聞いていた。

（それとね）

お姫様の背後に立つもうひとりの戦士を指でなぞりながら、さやの目が私を見る。

（ランドはね。さやが幸せになれるように、がんばっているの。本当よ。だからね）

胸が痛い。

（だから、お願い。お父さんと仲良くして）

頷くことさえ、出来なかった。

衝撃に耐えられなかった小さな身体が、宙に舞う。

そして、ゆつくりと地面に倒れた。おびたらしい血を流し、彼女はもう動かない。

女神コクーンは動かない。

（幸せだよ。みんなに見守られて、すごく幸せ）

（だから……泣かないで）

（泣かないで）

「俺」は、涙を流していた。

アゼリアの手が、再び俺の身体を支える。

「お前が造ったんだ。この世界を。聞こえているか？ ランド！」

まるで初めて俺を見たかのように、不思議な顔で私を見る、黒炎。やがて何かに気づいたように、目を見開いた。

「ここを歪んだ世界だと思うのは、それはお前のエゴでしかない。

だから——お前も、この世界から去らなければいけない」

ゆつくりと、銃口を上げて黒炎に向ける。引き金に指がかかった瞬間、ジャンヌと名乗ったGMと目が合った。

その女は、信じられないものを見るような目で俺を見ていたが、
やがて我に返ったように、右手の人差し指で私を指さし、

「BAN」

プレイヤーキャラクターにとって、もっとも不名誉なその言葉を
告げた。

8 帰還

夢からたたき出された。

身体を起こして、ヘッドギアを外す。見慣れた、ブラインドの降りた部屋。いつもの私の部屋だ。そう、これが私が生きている世界。途端に、とてもおかしくなって私は笑った。笑い続けた。

笑いがおさまると、視線をデスクに移す。そこには、クレパスで描かれた一枚の絵が飾られている。飾ったのは私ではない。描いた本人だ。

お気に入りのネグリジェを着て、私の前に飛び込んで来た少女。娘に裏切られてから——いや、それよりずっと前から孤独だった私にとって、ただひとつの光明。

彼女をこの家に連れて来たのは、桐島だった。

「両親の事は置いて、さやちゃんに素敵なおじいちゃんの思い出をあげてください」と、桐島は言った。

持病を持ち、先は長くないと宣告された娘の結婚相手に私が選んだ男だ。その鈴子が桐島との結婚を承諾せずに、もうひとりの助手と共に私の元を去ってから、彼はずっと私の側にいた。

「何が望みだ？」と聞くと、「十年も側に居るんですよ。ぽっと出の新人にこの立場は任せられません」と、きっぱり答えた。

だから、私は謝らなかつた。きつと、誰よりも私を罵って良い彼に。

鈴子が死んだ事を知っても、私は葬式にも行かなかつた。私を裏切った報いだと思っていたし、心のどこかでは桐島への負い目もあったのかも知れない。

でも。

桐島が孫を連れて来た時、それが間違っていたのではないかと思つたのだ。もしかしたら、赤ん坊であつたこの子を抱くチャンスだつてあつたのかも知れない。鈴子にだって、もっと安らかな死を与

えてやるべきだったかも知れないと。

さやもまた、鈴子と同じ病で亡くなった。幼すぎる命は、小さな光明は、再び私の前から消えたのだ。

絵の中で笑う、少女。

私はその子に、満足する「おじいちゃん像」を与えてやれただろうか。あの子の、たったひとつの願いすら叶えてやれなかった、私は。

しばらく待っていたが、桐島は来なかった。

だから、ブザーを押して呼ぶ。やがて、どたどたと足音が近づいて来る。

「すみません。ちょっと居眠りを……まだ、ログアウト時間じゃないですよ？ 先生」

確認するように言う、桐島。

「もう、あの世界に入る事はないよ」

「どうしたんですか？」

「アカウントバンされた」

一瞬、啞然とした顔をした桐島は、次にはぶつと吹き出した。

「何をやってるんですか」

年甲斐もなく。

自分でもそう言いたくなかった。だが、あの世界に生きた私は、それを選んだのだ。

ヴァンヘイル。彼に、叱咤されたような気がしていた。

「本当に、何をやっていたのだらうな、私は」

終わらない物語などない。ならば私も、自分の物語を完成させるべきなのだ。ちゃんと、自分が生きている世界で。

「あの引き出しに紫色の小箱が入っていると思う。取ってくれないか？」

緑色のペンダント。翡翠だ。純度が低く、中に入った遺物が翼を広げた鳥に見えた。翡翠は魔除けになると聞いた。鳥が好きな鈴子

の、二〇歳の誕生日に渡す予定だった。

一度は、捨てた。

それが、気がつくともたこの引き出しに入っていた。誰の仕業かは解っていたので、気がつかないふりをして引き出しごと封印していた。

桐島が差し出した箱を手に取り、私は肘掛けに手をかける。

ずっと、リハビリを続けていた。立てる筈だ。

終わらせなければならぬ。彼女たちが居る場所に、やがて訪れる時の為に。

- - - - -

その家を訪れたのは、初めてだった。

何度も招待状が届いていた筈なのに、それを私は全て黙殺した。

私の言いつけを守らなかった、鈴子。私に反乱を起こした二人を、許す気にはなれなかったから。

私に反抗した、その末路がこれだという顔をして私を迎えたのは、

眉元大地。

くしゃくしゃのシャツを着て、猫と戯れていた。

「久しぶりですね、眉元くん」

眉元は、無精髭に覆われた顔を上げ、まるで幽霊でも見るような目で私を見た。

「先生……どうして？」

「君に言っておきたいことと、聞いておきたかった事があったことを、思い出したのですよ」

眉元は、一礼をして立ち上がった。

「すみません、ちょっと顔を洗って来ます」

湯気のたつコーヒーを運んで来た眉元は、髭を剃って着替えて、先ほどよりもずっとすっきりした男になって戻って来た。

その間、私はずっと彼の飼い猫であるペルシャ系の猫を撫でていた。「ベル」と呼べば、懐いてくる。聞いた通りだ。

「ヴァンヘイルは、先生だったんですね。全然気がつきなかった」
少し困ったように、眉元が言う。

「私は、途中から気がついていたよ。黒炎がランド——つまり、君だと言うことは」

イベント更新と同時にそれより前にバグ技を使い、エデンからエルドラドに移動していた黒炎とリンコ。そんな事が出来るのは、運営側の事情を知る者だけだ。

ヴァンヘイルとしてあの世界で再会した時は、そこまでは考えていなかったが、ログアウト後に桐島の口から眉元大地の話进行を聞かされた時に、そう気づいた。

黒炎は彼なのではないか、と。

それでもヴァンヘイルの目から見た黒炎は、理想家で、人が良くて、そして強い男だった。

私は、彼の何を見て来たのだろう。彼の何を、知っているつもりでいたのだろう。鈴子を選んだ相手を見ようと、理解しようとしなかった。

「このペンダントは……」

「ベル」の首にかかったペンダントに気づいて、眉元が手に取る。それはリンコが持っていたものとよく似ている。さやには見せた事があったので、あの子が形状を眉元に話したのだと思っていた。

「鈴子の為に用意したものだ。渡すことは、なかったが」

ベルの首から外して、眉元に渡す。彼はそれを抱きしめ、泣いた。それだけで十分だった。

私と彼とは、常に平行線。
だが。

近づいているように見えることもあるはずだ。

「そつだ、聞きたいとは何ですか？」

思い出したように、眉元が言う。「ああ」と、私は笑った。

「今から、桐島さんと花見に行くんだよ。さやを連れて行ってあげる約束の場所へね。君も一緒に行かないか？」

眉元は、答えない。

ただ、何度も頷いていた。

ペルシャのベルが、啼いた。私の足にまとわりついて来る。

そうだ、お前もずっとそこに居たのだな。

だったら一緒に行こう。そう、四人で。あの約束の地へ。

エピソードに代えて——アゼリアの眩き

ヴァンヘイルが『COCOON』から追放された後、初めてのシステム障害が報告された。

つまり、「巻き戻り」。確認してみたら、『COCOON』時間で『女神復活』の前日まで巻き戻っていた。

運営は、この巻き戻りは巨大クライアントパッチ配布によるシステム障害であり、故意のものではないと説明したが——果たして、そのコメントを信じる者は少ない。

「女神」の降臨によって、新たに生み出される世界。その「女神」が大勢のプレイヤーキャラクターの目の前で殺されたのだ。

GMイベント失敗など、普通では有り得ないこと。だから、失敗した部分を消し取ったと考えたほうがよっぽど自然だ。

運営側の対応の悪さに、『COCOON』を去ったプレイヤーも多い。

でも、そんなことは私には関係のないこと。それに、プログラムに綻びを作った人間は、もうここには戻って来ないのだから。

私は、今日もこの地にログインしていた。

そろそろ、自分も潮時であることは解っていたが。

ヴァンヘイルに、私は最後まで告げなかった事実がある。それは、リアル世界の彼を多分知っている事。もしかしたらヴァンヘイルは薄々気づいていたかも知れない。でも、あえて口にしない。これは一生私の心の中にしまっておこうと思う。

ヴァンヘイルと共に生きたのは、私にとってとても大切な時間だった。

「おかえり、アゼリア。ようこそエデンへ」

そう言っただけ私を迎えてくれるのは、リンコ。彼女の肩にはもうインコは止まっていない。代わりに緑色の鳥が止まっている。

「巻き戻り」後、リンコのメッセンジャーバードだけが消えていた。運営に報告したら「バグ」によるロスト扱いになり、別の鳥が支給されたのだ。

「ただいま、リンコ」

私の言葉に、リンコが嬉しそうに笑う。

「ペガサス、どうだった？」

「見つけましたよ。リンコの情報通りでした。今から準備を整えて、見事に捕縛してみせます」

「武勇伝、待ってるから」

リンコに手を振り、最後になるかもしれない冒険に出る。

死んだ人の面影をいつまでも追うのは、きっと私の為にはならない。でも。

「ペガサスは、必ずゲットしますよ。しかも、狙うは純白です」

私は、その為に召喚士としてこの世界に生まれたのだから。

エピソードに代えて——アゼリアの眩き（後書き）

読んで頂き、ありがとうございました。

この作品は天崎 剣さん他主催であります「空想科学祭2010」出品作品でありながら、~~メ~~切に間に合わなかった極道作品です。ラストスパート中にちよつと事故があり。時間がない。書かなきゃ！ 終わらせなきゃ！ 軽いパニックを起こしながら投稿したものですので、読み返すのに本当に勇気がいりました。

やっと、改稿できた。これで、溜まったものがやっと出てくれた気分です。（安堵）

エピソード、必要なかったかも知れませんが、でも、アゼリアはお気に入りなのでやっぱり書いておかないと思います、書いてしまいました。

まだまだ未熟な私ですが、読んでいただいた方に、少しでも気に入っていただければと思います。
ありがとうございました。

2011・3・28

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5248n/>

COCOON

2011年4月3日14時55分発行